懐かしい思い出美しき日々

蓮華永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
懐かしい思い出美しき日々

【Ｎコード】
Ｎ３６５９Ｏ

【作者名】
蓮華永

【あらすじ】
朝比奈紫苑は毎日同じ夢を見る。そしていつも出てくる男の声を懐かしいとおもうがそれが誰かが判らない。そして・・・・・・、それは夢だけでは無くなっていく・・・・・・。

※これは、多少ＢＬもどきです。悪しからず。

記憶1

『覚えていて。俺のことを。ずっと、また次会う時まで。絶対だよ？俺は君を忘れたりしない。だから俺のことをちゃんと覚えていてね？』

懐かしい声が聞こえる・・・、でも知らない、判らない、君は・・・・・誰？懐かしいけど知らない声。君は誰・・・？

「・・・また・・・・・・。また見た・・・。いったい誰なんだろ・・・」

朝比奈紫苑（あさひなしおん）はいつも見る夢に起こされた。夢は記憶整理と言うが迷信だなとこの夢を見るたんびに思う。

「あ～、まだ6時半じゃん。しかも休日・・・。ま、いっか」

あの夢は何なだろうか。いつも不思議に思う。自分は男なのに聞こえてくる声は男のもの。それのせいで余計に厭になってくる。どうしたらいいだろうか、友達にでも相談してみようか。だが変な風にちゃかされ誤解されそうだ。

「あら、紫苑早いわね。どうしたの？」

下に下りると母がいて珍しく早く起きた紫苑に吃驚（びっくり）していた。

「ん、ちょっとなんか早く起きちゃってさ・・・。なんか食うもん有る？」

「そうね、目玉焼きなら作ってあげるわよ？」

「！まじ！？じゃあお言葉に甘えてお願いします。母君様」

ふざけ半分で頼むと母は笑いながらキッチンに入っていった。こんな役得が有るなら休日は早めに起きようか。

「あれぇ？紫苑早いわね。意外・・・。嵐くるかも・・・」

「ひでぇ言い草だな姉ちゃん・・・」

たったいま下りてきたのは紫苑の姉、架苑（かおん）である。

「父さんは・・・もう行ったか・・・」

朝比奈家の休日の日常会話である。（父抜き）

記憶１　（後書き）

しょうも無い小説ですが、どうぞよろしくお願いします。

記憶2

『ムラサキ、愛してる。何処の誰よりも。でも、俺は君の傍にずっといられない。だから・・・・・・』

まただ。またこの夢。だけどいつもと違う。いつも同じ場面の夢をみていたのに・・・・・・。なんだろう、すごく温かい・・・・。・・・・・・ムラサキって誰だ・・・？誰・・・・・・？

「起きろッ！！朝比奈紫苑！！」

「ッ！？・・・・って・・・・・・・やべ、授業中だった・・・・」

怒鳴られながら起きたら今は学校で授業中だった・・・・・・。しかも今の授業の担任は説教が長くて有名な先生だった。

「君は、授業中に寝るなんて何考えているんだ！！まったく、君はいつもちゃんと起きて授業を受けていて優秀な子なのに・・・・・・」

そりゃあ人間眠くなる時もありますよ。と紫苑は考えながら話を聞き流していた。

「まあ、君にしては珍しい事だし、1限目だし、君も勉強とかでつかれていたんだろう。今日は大目に見てあげよう」

「・・・！有難うございます！次からは気をつけます」

この先生が珍しく許してくれたので、紫苑は盛大に喜んだ。席に座ってすぐに後ろから、

「おい。どうしたんだよ。お前が授業中寝るなんて・・・・・・」

と、友達の紫藤翔太（しどうしょうた）が聞いてきた。

「最近夢見がわるくてさ・・・・・・、変な夢みんのよ」

少し本気で心配している様なので、正直に言ってみた。

「ふーん・・・。で、どんな夢？」

やっぱり聞いてきた。紫苑は悩んだ末、

「昼休みに屋上で言うよ・・・・・・」

と、腹を括った。流石に此処では言いにくい。せめて、昼頃誰もい

ない屋上ならいいだろう、と思ったので、昼に恥を忍んで言うことにした。
「・・・・・・ん。判った」
「物判りのいい友を持つと楽だわ・・・」
「おめぇは物判り悪いけどな・・・」
正直に褒めたのに何故か罵倒された。
「ひっでぇな。人がせっかく褒めたのに・・・！」
翔太は笑って、紫苑もつられて笑っていた。そして、そんな紫苑を遠くから見ている一人の青年がいた。
「・・・・・・見つけた・・・・・・。『ムラサキ』・・・」
そして青年は一瞬のうちに消えていた。

記憶２（後書き）

あ～、微妙ですね。どうぞ読んで罵倒なさって下さい。読んで下さった人達有難うございます。

記憶3

『君の傍にずっと居られない事を許してくれ。でも君と俺が――』
何処？貴方の声が聞こえるのに、私の目には貴方の姿が見えない。傍に居たいのに、貴方が居なければ私の『幸せ』が完成しないの・・・・・・。お願い『狼(ロウ)』私の傍に居て・・・・・・・。永遠の刻(とき)を貴方と共に居たいの。だから次に会う時・・・・・・・、私たちが――――。

紫苑は目が覚めた。何か違和感を感じたからだ。今の夢に・・・・・・。何故なら、
「何なんだ。今の・・・・・・、『私』って、『狼』って・・・・・・・。っんとなんなんだよ・・・・・・」
先日、友人の翔太に色々と相談したところ、曰(いわ)く「妄想だろ。」だ。
こいつに相談した俺が馬鹿だった。
と、後悔した。ついでに、こいつにもう二度と相談しねぇ。と決心したのもその時である。
「『ムラサキ』、『私』、『狼』・・・・・・・、いったい何なんだろう、いやに実感有るんだよな。それに、なんか聞き覚えが有るんだよな。あの声・・・・・・」
そういや、今何時だ、と思い枕元に置いてある携帯を開いて見た。
「！　やっべ！　もう7時半だ！　早くしねぇと！」
紫苑はベッドから下りて急いで準備を始めた。もうちょっと遅かったら完全遅刻だ。急いで下に下り、朝食を食べる。
「急ぎなさいよ、紫苑。遅刻するわよ？じゃ、私先行くから」
急いで朝食をかき込み、途中でむせる。
「馬鹿」

「ちょっと、紫苑大丈夫？ほら水よ。架苑、いってらっしゃい」
「いってきまぁす。あっそうだ。帰り何か買ってくる物ある？」
「特にないわ。有難うね。ほらいってきなさい」
「はぁい。じゃぁ、遅刻しない様にね。紫苑」
「わかってる・・・よ・・・・・。ごほっ、ごほっ・・・・・・」
架苑を見送ってから、さっさと歯を磨き、鞄を持ってきて、架苑の後を追うように、学校に行く。
「いってきまーす！」
「いってらっしゃい。気をつけてね」
見送る母を背にして、駅まで、走る。架苑は自転車だが、紫苑は歩きで電車なので、余計に急いだ。そして角を曲ったときに人とぶつかった。
「・・・ッ！ごめんなさい！急いでいたので！」
紫苑はぶつかった人に謝って、また走りだそうとしたら、腕を掴まれ、後ろに倒れそうになったが、その人がおさえてくれた。
「見つけた・・・・・・。ムラサキ・・・・・・、紫苑・・・・・・」
紫苑は目を見開いた。此の声には聞き覚えがあった。だってこれは、此の声は、夢に・・・・・・、夢でよく聞く声で、懐かしいものだからだ。
「あんた・・・・・・」
「やっと会えた・・・・・・。ムラサキ・・・・・・」
何故だろう。此の人に会ったとたん、何かが崩れ落ちる音が、頭の中で響いた。
狼・・・・・・それは『破壊』。此の人は・・・・・・。
此の人は、全てを壊しにきたのだ。
紫苑の平穏な日常と平和を。
そして、此の人は守るのだ。
紫苑の平穏な日常と平和を。それと安寧(あんねい)を――――――――。

記憶3（後書き）

厭な終わり方でしたね。済みません。これ多分殆んどシリアスです。
（予定だと・・・・・。）自分的にはこの話好きなんですけどね。
こんな話ですが読んでいただけると光栄です。

記憶４

黒髪碧眼の男が目の前に居る。此の人を俺は知っている。でも、知らない。判らない。此の人を知っているのに知らない。でも此の声だけは確かに知っている。だって此の声は――――――――。
私の大切な人。私の愛する人。此の人の名前は、『狼』。私の愛しい人。

とっさに紫苑はその腕を振り払った。その人は少し目を見開いた。が、すぐ、無表情に戻った。
「あんた・・・、もしかして『狼』・・・なのか・・・・・・・？」
紫苑は思い切って聞いて名前を聞いたら、男は目を見開いた。
「覚えて・・・。・・・・・・・っ、そう・・・・だ・・・・・・・」
一瞬その男・・・狼はつらそうな顔をした。そして次の瞬間紫苑の視界がゆれた。
「・・・ッ！！？」
なん・・・だ・・・・・・・。
そして紫苑はそのまま、気を失った。そして狼は、倒れかけた紫苑を抱きかかえた。
「ごめん。ムラサキ・・・・、でもゆるして・・・・」
今から君の平穏な日常と平和を壊す事を。でもちゃんと守るから。
これから君の平穏な日常と平和と・・・・。
そして、永遠の『死』という安寧を・・・・。

記憶４（後書き）

短いですね。でも気にせず読んでいただけると光栄です。
私の他の作品共々よろしくお願いします。

記憶5

私の愛おしい人。何時も私の傍に居てくれた・・・、私の愛してやまない狼・・・。永遠に貴方を愛しています。貴方は私を愛してますか？愛してくれていますか？

雨が降っている。雨は嫌いだ。雨の降っているあの日、君を失った。だから、雨は嫌いだ。

「ねね、狼。紫苑様は起きないの？　起きないのかしら？　ねぇ、桜花（おうか）」

「ねぇ、起きないのかしらね？　紫苑様は。ねぇ、楼華（ろうか）」

キャッキャッ、と笑っている二つの可愛い声がする。黒髪碧眼のツインテールをしていて白いゴスロリを着ている方が桜花、白髪翡翠のポニーテールで黒のゴスロリを着ている方が楼華。双子の姉妹である。

「お前ら・・・、本気でムラサキを心配してんのか？遊んでいるようにしか見えないんだが・・・」

異様に遊んで見える二人に少し語気を強めにして聞いてみると、二人は言った。

「心配してるよ～。だけど紫苑様を落として連れて来たのは狼なのよ？　」

「そうよ。紫苑様を落として連れて来たのは、狼よ？　」

そう言って二人は紫苑をいじり始めた。「うっ・・」と狼は少し呻いた。そうだ。紫苑を落とした・・・、気絶させたのは狼本人だ。

「ただいまぁ。あれ？　狼いたんだねぇ。ほら、狼がいるよ。璃宇（リウ）」

「あぁ、ホントだ狼が帰ってきてる。・・・紫苑様がいる。何？誘拐してきたの？　狼。悪い人がいるよ。羅宇（ラウ）」

今帰って来たのは、羅宇と璃宇。こちらも双子で兄弟である。黒髪紅眼の長髪が羅宇で金髪碧眼で短髪なのが璃宇。

「・・・・・・。誘拐は・・・・・・・・・・・・、して・・・・」
『誘拐でしょ。紫苑様を落として連れて来たのだから。誘拐よ誘拐なのよ』
無い。と言いかけた狼に桜花と楼華が追い詰める。
「ぐっ・・・・！」
『そうか・・・・。誘拐か。とうとう犯罪に手を染めたな狼』
そして羅宇と璃宇も狼を追い詰める。
「ぐぐっ！　お前ら今すぐ消えろっ！」
狼は耐え切れず叫んだ。そうすると。
「ぅ・・・・ん・・・・」
シーン。みんな一斉に黙った。いくら無理矢理寝かしたからと言って無理矢理起こしたくはない。
『狼が大声を出すからですよ。紫苑様が起きたらどうするの？　の？』
『そうだよ。紫苑様が起きたら、狼の所為だよ？』
２組共声を合わせて、狼を追い詰める。
「俺だけの所為かよ・・・・」
紫苑は自分が寝ている間にこんなやり取りがあるとは知らない。

記憶5（後書き）

双子祭です。私は双子が好きなので、他の話でも双子は沢山出ると思います。希少なんだけどね、双子は・・・。まぁ、そんな事は気にせず読んでいた下さると嬉しいです。

記憶6

今すぐ貴方の傍に・・・。

『起きないのよ、紫苑様。どうするの？　の？　狼。紫苑様が起きなかったらどうするの？』

『そうだよ。どうするのさ。此処に鳳凰様と鸞凰様が居たら、やばかったよ？　狼』

と、桜花楼華、羅宇璃宇。此の四人は狼を責める。

「今此処でその二人の名前を出すな・・・！」

自分の苦手な人物の名前を出され少し怒る狼。だが狼もあせっていた。未だに紫苑が起きない。どうしようか。今此処に本当に鳳凰と鸞凰が居たらやばかった。それと・・・。

「江様と瑙様も居たら大変ですの！」

「大変ですよ！　鳳凰様も鸞凰様も江様も瑙様、皆様紫苑様絶対主義ですもの！」

と、桜花と楼華が言った。

「そいつらの名前も出すなっ・・・！」

もう一つ（二つ？）の厭な名前を出され少し落ち込んできた狼。

その時微かに紫苑の瞼が震えた。

「紫苑！」

『『！！』』

狼が声をかけると紫苑は目を開き、狼を見た。

「狼・・・。やっと、会えた・・・。私の愛しい人・・・」

狼と羅宇、璃宇と桜花、楼華は目を見開いた。『愛しい人』と、言ったのだ。紫苑は確かにそう言った。その言葉は・・・、紫苑が・・・ムラサキがよく狼に言っていた言葉である。

「『覚醒』・・・にしては早いんですの・・・」

「早すぎるんですの・・・」

「おかしいよ・・・早すぎる・・・・」
「ああ、おかしすぎる・・・」
四人は口々にそう言った
紫苑は狼を見つめ、微笑んだまま倒れた。

記憶６（後書き）

まだまだ双子は出ますよ。後２組位・・・。
済みません。双子ばかりで・・・。
それでも気にせず読んで下さると光栄です。

記憶7

「どういうこと!?なんで?『覚醒』には、早過ぎる!」
「そうだよ!なんで?『覚醒』の時にしては、早過ぎる!」
羅宇と璃宇が焦っている。
「げっ・・・、ゲートを開けて皆様を・・・・!」
「そうですわ!ゲートを開けて皆様を・・・・!」
桜花と楼華はゲートを開けると言い出した。狼が叫んだ。
「桜花、楼華!今すぐあいつらを呼べ!ゲートを玄関に開け!」
『わ・・・判りました!』
二人は応じ、玄関に向き直り、手をかざす。
『『今繋ぐ全ての扉。今開ける異次元の扉。開けッ玄宗霧幽界(げんそうむゆうかい)!』』
玄関の扉が淡く輝く。
「じゃぁ、僕らが呼びに行ってくる」
「行ってくるよ。行こう羅宇・・・」
羅宇と璃宇が外へ行く。すぅと二人の姿が消えていく。
「ムラサキ・・・。何で・・・・・・。今の君は全てを・・・覚えていないはずなのに・・・」
何で・・・その言葉を言うんだ。何で、『あの時』と同じ顔をするんだ。君は今『空っぽ』なのに・・・。どうして・・・・・・。
『紫苑様は・・・、大丈夫ですの?何故・・・『覚醒』していないのに、貴方のことを・・・』
「判らない・・・。でも多分まだ『覚醒』はしていないと思う・・・」
だって紫苑は『それ』を言って倒れた。一瞬だった・・・。
「ただな・・・、俺が今恐れているのは、『あいつら』だ・・・」
『そっ・・・そうですわね・・・・・・。きっと事情を聞いたらまず狼が怒られるわ・・・』
紫苑を落として連れてきたなんて、言ったら絶対怒られる。「大

事な紫苑に何をするん（だ！・ですか！）」と。絶対怒られる。それだけは、絶対厭だ。
「腹を括ってしまいなさい、狼。絶対に通るべき『ミチ』ですわ」
「そうです。狼、括ってしまいなさい。通るべきです。『ミチ』を」
さっきまでの雰囲気は一体何なんだ？と思える空気だ。此の双子共は狼をいじめるのが大好きである。
「お前らぁ・・・！他人事だと思って勝手なことを言いやがって・・・・・！」
『他人事ですもの』
きっぱり言われがっくり肩を落とす狼。昔っからこいつらの相手だけは疲れる。二人はピクッと反応した。
「・・・。来たか・・・・・・・」
『『開けます』』
ザァァ・・・。と音を立ててドアが開いた。
『お久しぶりでございます。鳳凰様、鸞凰様と江様、瑙様』
桜花と楼華が丁寧にお辞儀した。狼も軽くお辞儀する。
『久しぶり。桜花楼華』
『お久しぶりね。桜ちゃん楼ちゃん』
『『それと・・・。狼も』』
「お久しぶりです。皆様方」
二人には愛想よく挨拶するが狼にはついで程度に挨拶をする。
『『・・でっ！狼これはどういうこと（だ！・ですか！）紫苑が『半覚醒』したというのは！それにお前紫苑に乱暴したときいたぞ！』』
予想通り怒られたのでハァと溜息をつく。
「それは・・・、悪いと思っていますよ・・・。ですが今はそれよりムラ・・・、紫苑の事だ・・・・・・」
『そうだな』
『そうですわね』
そして皆で紫苑を囲む。

記憶7（後書き）

ははっ・・・。話なっげぇは・・・これ・・・・・・。
ですが気にせず読んで下さると光栄です。
よろしくお願いすます。

記憶8

どうして――――――――――――――――？君は・・・・。

全てを貴方と共に・・・・・・・。

「紫苑起きなさい！紫苑！」

「起きるのです！紫苑！！」

江と瑠が叫ぶ。

「起きて！紫苑起きるのです！」

「紫苑！目を覚ませ！紫苑！！」

鳳凰と鸞凰も叫ぶ。

だが紫苑に反応は無い。桜花と楼華が泣きかけている。羅宇と璃宇は少し離れた場所で佇んでいる。璃宇は少し涙目だった。羅宇はそんな咆宇の頭をなでている。

「ムラサキ・・・」

狼は紫苑の手を握った。すると・・・。

「――――――――――――――――――――。・・・あんた・・・・・・・」

「っ！ムラサキ！」

紫苑が目を覚ました。鳳凰と鸞凰はハァ～と盛大に息を吐いていた。江と瑠は今にも桜花と楼華と泣きそうになっていた。璃宇はもう静かに泣いていた。羅宇は自分の顔を覆っている。

「・・・えーっと・・・・・・・。これってどういう状況・・・なんだ？」

紫苑は知らない人だらけで混乱していた。狼はそんな紫苑の頭を撫でた。

「あんた・・・夢に出てきた・・・！」

紫苑の一言に狼以外の全員が驚いた。

『『『『夢に狼が出てきてる（のか！？・の！？・のですか！？・

んですか！？）『『『『
「全員一斉に言うな。ムラ・・・紫苑が驚いている・・・」
「（双子だらけ・・・）えーっと、皆さん俺を知っているの？なんで？俺貴方達に今会ったっぱっかなのに・・・・・・」
紫苑の問いかけに皆が黙りこむ。今『昔』について言う気は皆無い。
だんまりを決め込む皆に少し困惑する紫苑。
『紫苑様。お腹は減っていませんか？何かお出ししましょうか？』
唐突に桜花楼華は話をそらし紫苑に話かける。
「（うわぁ～可愛い！）えーっと・・・・・・、とりあえず一つ聞いていい？」
『何でしょう？』
二人して同じ方向に首をかしげる。ちょこんと。
「（可愛い！可愛過ぎる！）なんで『様』付けなの？初対面の人に『様』付けされると、ちょっと居心地悪い・・・」
『それは・・・』と口を開きかけた桜花と楼華はまた黙った。
『初めまして。紫苑様・・・』
「僕の名前は羅宇」
「俺の名前は璃宇」
『よろしく（ね）』
次に羅宇と璃宇が紫苑に声をかける。
「よ・・・よろしく」
紫苑が言うと二人はニコッと笑った。
『『初めまして。紫苑』』
「俺の名前は鳳凰だ」
「僕の名前は鸞凰だよ」
鳳凰と鸞凰が挨拶する。
「私の名前は江よ」
「私の名前は瑙よ」
次に江と瑙が挨拶をする。そして４人は笑って。

『『よろしくね。紫苑』』
「よ・・・・・よろしくお願いします」
流石に目上の人と判ったのか、多少敬語気味になった紫苑。
『初めましてですわ。紫苑様』
「私の名前は桜花ですわ」
「私の名前は楼華ですの」
『よろしくお願いしますわ』
一番最初に声をかけた二人が最後に挨拶をした。
『『『『貴方は覚えて（ないが。・いませんが。いないけど。いませんけども。）我々は貴方を忘れたことなど一度たりともありません（わ・の）』』』』
紫苑は目を見開いた。
知っている・・・気がする・・・・・・。この顔を・・・・。だって・・・・。
『此の人達は俺（私）の・・・大切な・・・・』
声がかぶった。一体誰の声だろう。でも・・・知っている・・・・・・・。
そんな紫苑を皆は目を見開いて見ていた。だって今重なった声は『紫苑』の声だったからだ。
紫苑では無く、『紫苑』の声だった。今のは・・・・。
まだ『覚醒』はしていないのに・・・・・・・。

記憶８（後書き）

済みません。こんなで。
気にせず読んでいただけると光栄です。

記憶9

雨は嫌いだ。何でかは知らないけど、小さい頃から嫌いだった。

紫苑も狼も桜花、楼華も羅宇、璃宇も鳳凰、鸞凰も江、瑠も呆然としていた。

今の声は確実『紫苑』だった。紫苑と『紫苑』の声だった。何故、まだ『覚醒』していないのに。

「ムラ・・・サキ・・・・・・？　『居る』・・・の？　」

狼はおずおずと腕を伸ばして、紫苑の髪に触れた。紫苑はビクッとして手を払いのけようと思ったけど、狼が・・・余りにも悲しそうでつらそうな顔をしたから、それを止めた。

「ムラサ・・・キ・・・！　っ・・・・」

余りにも悲しすぎた。そして同時に余りにも嬉しすぎた。

覚えていてかも知れない。『あの事』を、だから悲しかった。

覚えていたかも知れない。『あの日』を、だから嬉しかった。

「な・・・！　何で泣くの!？　どうして？　俺何かしたっ？　ねっねぇってさぁ・・・！　」

紫苑はおどおどしていたが、他の人達は唖然としていた。

『『『『（あの・・・あの狼が泣いた・・・っ!？）』』』』

何時も無表情か薄ら笑うかのどちらかで、誰も狼が泣いたとこなんて見たことが無い。

『『『『狼が泣いたーーーーーーーーー!？』』』』

ついつい叫ぶツインズ達。

『っ!？』

それに吃驚した狼と紫苑。狼は不覚と言わんばかりにがっくり項垂れた。

それを見ていた紫苑はついつい笑ってしまう。

「ハハッ・・・！　す・・・済みません・・・！　でも・・・・・・

、流石に笑ってしまいますよ・・・」
全員は顔を見合わせ、全員で笑った。

穏やかな時。これは束の間のひと時。でも永遠に続けばいい。そう願い続ける。

記憶9（後書き）

ちょっとシリアス抜けました。
脱シリアス！
志します。以後気をつけますね。
これからもよろしくお願いします。

記憶１０

気づいたら、何故か家だった・・・。しかも自分の・・・・・・。何時・・・自分は此処に戻って来たんだ？

「よっ・・・。ッ・・・！　頭痛ぇ・・・」

起きたら、ズキッと、頭が痛くなった。いや、それにしても何時自分の家に、しかも部屋に戻って来たんだろう・・・。

『紫苑様、お早うございますです！』

『お早う、紫苑様。よく寝れましたか？』

『紫苑、大丈夫か？　よく寝ていたが・・・』

『紫苑お早う。よく寝れた？』

一時停止。

紫苑は固まった。吃驚し過ぎて。何故此の人らが此処に居る。

「紫苑・・・？　どうした？」

最も一番吃驚したものは、狼である。だって紫苑が寝ていたベットのすぐ横に居たからである。

「な・・・なんで皆さん此処に居るんですか・・・？　（心臓に悪いぞ！　コレッ）と言うか何時、俺此処に戻って来たんです？」

『『『『４，５時間前』』』』

紫苑の問いに双子全員で冷静に答えられると、なんか気落ちする・・・。と言うか焦っている自分が馬鹿みたいだ・・・・・。

「紫苑。そろそろ準備しないと学校遅刻するぞ」

「・・・ッ！　もう、そんな時間！？　い・・・急がなきゃ・・・！」

狼の指摘に紫苑は慌てる。そんな様子の紫苑を見ながら、鳳凰、鸞凰と江、瑠は狼にあることを聞いた。

『『狼・・・、学校とは何（だ・なの）？』』

「・・・・・・。ハァ～～・・・、めんどくせ・・・」

と、狼はボソッと言った。もちろん４人はそれを聞き逃さなかっ

た。
『『面倒くさいとは（なんですか・なんだ）！　狼のくせに・・・！』』
「学校も知らない人たちに馬鹿にされたくねぇなぁ・・・。お前らは知ってるか？」
狼は一応上司である４人を馬鹿にしつつ残りの双子達に聞く。
『『知って（います・るよ）』』
と、羅宇と璃宇と桜花、楼華は答えた。知らないのは狼達の上司だけの様だ。
『『お主らは、（俺・私）達を馬鹿にしている（のですか・のか）！？』』
『『「べっつに～」』』
「ぷっ・・・くくっ・・・・・・！」
『『『『「・・・・・・・・・・」』』』』
紫苑が笑っている。その笑顔は何時まで続くだろうか・・・？その笑顔のおかげでどれだけ自分等が救われているか。
何時までも笑っていて、『我が君』よ――――――――。

記憶１０（後書き）

楽しんでいただけると光栄です。
それでは次回ー。

記憶１１

帰ってきたら、まだ・・・

『鳳凰様の負けですの！』

「鳳は馬鹿だね・・・。よく負けてる。っていうか全部負けてるね・・・」

『鳳凰は馬鹿だ』

『鳳凰様は案外弱いんですね』

「ずっと大貧民で俺にずっとカードをあげるはめに・・・。鳳凰様は馬鹿だな」

「貴様ら！　黙らんか！」

居た。そして何処から引っ張り出したのかは判らないけど、皆でトランプ・・・、大富豪をしていた。こんだけ騒いで、何故親に見つからないんだろう。

『『『『「あっ、お帰り（なさい）。（ムラサキ・紫苑（様））」』』』』

「た・・・ただいま・・・。何時からトランプしているの？」

『『『『「（ムラサキ・紫苑（様））が出掛けた後から（です）」』』』』

長すぎる。紫苑が出掛けた後からずっとやっているということは１１時間以上やっているということだ。何故そこまで没頭できるのだろう？謎だ。

「よく、続けれますね・・・」

『『『『「楽しいから（な・ですから）。結構没頭（出来る・出来ますよ）。特に神経衰弱が面白い（です）」』』』』

「そう・・・」

双子でよくハモル事はあるが、双子４組の狼一人で何故そんなにハモルんだろうか？謎だ。

「ムラサキもやるか？　楽しいぞ」

困惑にも近しい混乱に陥っている、紫苑に狼は声をかけ、トランプに誘う。
「その前に・・・、一つ聞いていい？　」
『『『『「なん（だ・ですの）？　」』』』』
「うちの・・・、母親に見つかってないよね？　」
今まで疑問に思っていたことを紫苑は皆に聞いた。
「大丈夫だ。ムラサキ以外の人間が入ってきてもいいように、異次元につなげてあるから。俺たちが異次元に此の部屋のコピーして異動したんだ。で、紫苑も此処に来れるようにしたから、大丈夫」
と、紫苑の質問に狼が余裕綽々と言ったていで、答えた。その余裕さに一瞬、眩暈（めまい）をしそうになった紫苑であった。

記憶１１（後書き）

コメディですねぇ。楽しいですよ、コメディを書くのは。

記憶１２

『「初めまして」』
「転校してきた、秋風羅宇（あきかぜらう）です」
「同じく、弟の璃宇（りう）です」
「同じく、名古屋狼（なごやろう）です」
紫苑は呆然としていた。だって、目の前に・・・、転校してきたのが、『あの人』達だからだった・・・・・・。
「きゃあ！　美形ジャン！」
「ねぇ～！」
と女子たちの黄色い声が聞こえてきた。
そして、止めと言わんばかりに、何故か、紫苑の前と左右の席が『空いていた』。此の前まで此の席に『居た』はずの人たちが、居ないのだ。休んでいるもんだと、思っていたが、まさか・・・。
「じゃ、席は朝比奈の隣左右と前な」
やっぱり。では、何処に行ったんだ！　此の前まで此の席達に居た人たちは・・・！
『よろしくね。紫苑様』
と、二人は小さな声で言った。紫苑は引き攣った笑顔をした。
『よろしくね。朝比奈君』
「よろしく。朝比奈」
何時も思う。何故此の人達は、余裕綽々と何でも言って、やるんだろう。

昼休み。誰かに見られずに、屋上に来れたことが不思議だ。
「何で、貴方達が此処に居るんですか！？　何故、転校してきたんですか？」
『「紫苑（様）を守るため」』
だから何でそんなにハモルのかな此の人達は・・・。

記憶１２（後書き）

転校してきました。
こちらの都合上、咆宇を璃宇に変えさせていただきました。
申し訳ない。

と言うか、狼って幾つ何だろう・・・？

記憶13

「あれ？　『あいつら』が学校に居るよ。力弥（りきや）」
「え？　あっ本当だ。あいつらが居るよ。力斗（りきと）」
「楽しくなりそうだ、な？」
「うん、楽しくなりそうだ」
楽しそうに、くすくすと笑う二つの人物。

「狼、これ判る？」
「あ、これは・・・」
昼休み。紫苑は宿題をしていた。その傍にはもちろん羅宇、璃宇、狼の三人が居る。此の三人が転校してきて、早一ヶ月。もう、此れが完全なデフォルトになっていた。
『紫苑は頭がいいね。凄いや』
と、二人が言う。何時もは『様』付けだが、学校なので呼び捨てである。もちろん家に帰ったら、土下座をしている。鳳凰鸞凰曰く、「不敬罪、だ・です！」だそうな。
「ん？　あ、あれ、隣のクラスの芳賀（はがみ）見兄弟だ。やっぱ、双子なだけあって、目立つな～」
ふと、廊下を見れば、芳賀見と言う、隣のクラスの双子が居た。
兄の力弥と弟の力斗は何時も、一緒に居る。
『「あいつら・・・！」』
と、三人が驚愕の顔をして、二人を見ていた。不思議に思い、紫苑は首を傾げ、三人に聞いた。
「どうしたの？　三人共。何、知り合いなの？」
『「え～っと・・・」』
微妙に三人は歯切れが悪い。余計に不思議に思う。
『羅宇、璃宇、狼。久しぶりだな』
「ほへ？」

何故か、芳賀見兄弟が声をかけてきた。

記憶１３（後書き）

また、双子・・・。
済みませんホント・・・・・・。
ですが、予定では三つ子も出ると思います。
マジで済みません。

記憶１４

最近屋上をよく利用するな、と思う紫苑であった。

『お久しぶりです。紫苑様』

「わ～・・・、全然覚えてねぇよ、俺」

『まぁ、それは仕方無いことです』

「なんか、逆に開き直られたような・・・」

そんな会話をして、紫苑は苦虫を噛んだ様な顔をした。

『「力弥と力斗、居た、のか・んだ。全然気付かなかった・・・」』

『凄いね、羅宇と璃宇なら判るけど、狼まで判らなかったなんて・・・！』

「悪ぃか？」

本当につくづく思う、双子ならハモルのも判る。だが、何故、其処に狼まで加わって、全員でハモルんだろう・・・。

「力弥と力斗も前世、一緒に居たんだ・・・」

以前教えてもらった、紫苑は過去・・・、前世に皆とずっと傍に居たことを・・・。本当は前世の記憶を・・・、全てを『覚えているはずだった』。なのに、何かのショックで記憶が無くなったらしい。

『君等今、何処に住んでんの？　前行ったら、あそこに居なかったよね？』

『「今、紫苑（様）の部屋のコピーに住んでる」』

『なんて恐れ多い事してんの？　君等・・・』

「恐れ多いんだ・・・」

俺ってどういう存在？　とつくづく思う。

『マジで住んでるよ・・・。しかも、鳳凰様と鸞凰様と江様と瑙様

まで・・・』

『『！！　力弥！　力斗！　何故此処に！？』』

鳳凰、鸞凰と江、瑙は物凄く絶句した。まぁ、自分等の上司がかなり普通にナチュラルに『我が君』の家に住んでいるというのは、此の４人の上司からも、結構文句を言われた。

『どうせなら、僕らも此処で住もうかな・・・』

「さっき恐れ多いと言っていたのは何処の誰だ？　おい」

『誰だろうね』

二人は思いっきりしらばっくれた。

記憶１４（後書き）

双子って結構書きやすいです。
楽しいです。書いているのが。

記憶１４・５

其の日は朝から騒がしかった。
「う・・・ん・・・・・・？」
「待て、鳳凰！　それはずるいぞ！」
「やかましい！　これは俺のだ！　あきらめろ、狼！」
「否だね！」
「鳳、それは僕もずるいと思うよ・・・」
狼と鳳凰と鸞凰の声がする。何だろうと思い、俺は身体を起こす。
「あ、羅宇、璃宇。お早う・・・。なぁ、あれ何してんの？」
『お早うございます、紫苑様』
「あれは、醜い大人による、醜い争いです」
「二人共余ったお菓子の争奪戦してるんですよ」
「は？」
俺は聞き返した。だが、目の前で繰り広げられている、『醜い大人による、醜い争い』はあながち、間違っていなかった。
二人共、璃宇の言った通り、残った、お菓子の争奪戦をしていた。どんなふうにかと言うと、不公平なしの、ありきたりな、じゃんけんで。
「あーーー・・・・・・・・・・・・。よし、此処は、俺が食うべき」
俺はベットからおりて、皿の上に乗っている、お菓子を口の中にほおりこんだ。
『『「あ・・・」』』
羅宇、璃宇も鳳凰、鸞凰も狼もぽかんと口を開けていた。確か、こういうのって漁夫の利って、言わなかったっけ？

記憶１４・５（後書き）

書きたかったんですよ。番外編を。
たまにはと思いまして・・・。

記憶15

貴方を愛しています。

ずっと、ずっと貴方だけを愛し続けています――――――――――。

私の愛おしい人、狼――――――――――。

「ムラ・・・サキ・・・・・・・？　何処・・・・？」

声がした・・・・。一番愛おしい、恋人の・・・・・・・、声がした・・・・。

――――――――――貴方が傍に居なければ、私は壊れてしまうわ・・・・。お願い、狼。私を一人にしないで・・・・。

「ムラサキ・・・・！」

ずっと、傍に居ると誓った。だが、それは叶わないと自分は知っていた。

愛している。傍に居られなかった、愛しい恋人・・・・。

「そろそろ、あいつらから、紫苑についての報告があってもいいんだが・・・・・・。何故何も来ない・・・・」

「何故でしょうね・・・？　鳳凰と江からも特に何も聞いていませんし・・・」
「よし、俺が直々に出向いてやるか」
「仕事をしてからにして下さい。月詠（つくよみ）様」
「・・・ハイ・・・・・・」

記憶１５（後書き）

狼と謎のあいつらの上司以外あんま出てこなかった・・・！
ムラサキさんは出てきたと言っていいのか謎ですし・・・。

記憶16

「よう！　皆々様方！」
『『『『「月詠（つくよみ）（様）！！？」』』』』』
「ほへ？」

またしても知らない人が現れました。

藍色の髪に、緑色の瞳。
此の人の名は、月詠と言う。
「久しぶりだな。姫」
「……？　姫？」
「そ、ひ、グフゥッ！！」
「！　ちょ、狼！！　月詠さん、大丈夫ですか…！？」
「姫」について説明しようとした、月詠は狼に鳩尾（みぞおち）をやられた。
「大丈夫だ、紫苑。こいつはそんなこんなで簡単には死なない……」
「それでも駄目だろ！！」
「……御免……」
「何…だ……？　狼、お前姫の事『紫苑』と呼んでいるのか……？
昔みたいに、ゴホゥ！！」
「狼！！」
狼は今度は月詠に踵落（かかと）としを喰らわせた。
「いい加減黙れ……！」
「……」
「大丈夫ですか？　本気で……」
「大丈夫だ、気にしなくていいよ。姫……」

何か、慣れないけど、覚えている気がする……。

記憶１６（後書き）

更新ー。
久しぶりに書いたーー。
連載停止にはならないようにならなくちゃ・・・。

プロフィール（前書き）

たまにはと思いまして、書いてみました。

プロフィール

朝比奈（あさひな）　紫苑（しおん）

年齢：１６歳

身長：１７５センチメートル

体重：６５キログラム

特技：手先が器用で、案外料理が得意。絵を描くのが昔から好きで、物凄く上手。

趣味：読書。勉強。絵を描くこと。料理。

名古屋（なごや）　狼（ろう）

年齢：？歳

身長：１８８センチメートル

体重：７５キログラム

特技：剣術。と言うか、主に武道は全てたしなむ程度なら心得ている。

趣味：読書。人間には余り興味無いが人間観察。昼寝。

天白（たかしろ）　桜花（おうか）

年齢：１３歳

身長：１２５センチメートル

体重：３４キログラム

特技：料理。魔術など。

趣味：狼苛め。絵を描くこと。

天白　楼華（ろうか）

年齢：１３歳

身長：１４９センチメートル

体重：３９キログラム

特技：魔術など。手先が器用なので、色々と出来る。

趣味：狼苛め。人間観察。

秋風（あきかぜ）　羅宇（らう）

年齢：１８歳
身長：１７９センチメートル
体重：７９キログラム
特技：武術など。
趣味：狼苛め。読書。

秋風　璃宇（りう）
年齢：１８歳
身長：１７５センチメートル
体重：７６キログラム
特技：武術など。
趣味：狼苛め。読書。弓道。

芳賀見（はがみ）　力斗（りきと）
年齢：１６歳
身長：１７３センチメートル

体重：６９キログラム
特技：魔術。武術。料理。
趣味：料理。剣道。

芳賀見　力弥（りきや）
年齢：１６歳
身長：１６９センチメートル
体重：６５キログラム
特技：魔術。武術。
趣味：読書。柔道。

鳳凰（ほうおう）
年齢：？歳
身長：１８２センチメートル
体重：７８キログラム
特技：色々出来る。

趣味：読書。

鸞凰（らんおう）

年齢：？歳

身長：１８５センチメートル

体重：７３キログラム

特技：色々出来る。

趣味：読書。鳳凰苛め。

江（こう）

年齢：？歳

身長：１６６センチメートル

体重：５０キログラム

特技：色々出来る。

趣味：魔術。鳳凰苛め。

瑙（のう）

年齢：？歳

身長：１５７センチメートル

体重：４６キログラム

特技：色々出来る。

趣味：武術。狼、鳳凰苛め。

篁（たかむら）　月詠（つくよみ）

年齢：２８歳（見た目は）

身長：１９１センチメートル

体重：７８キログラム

特技：全て可能。（逆に何が出来るんだろ・・・）

趣味：各務を苛めること。

相模（さがみ）　各務（かがみ）

年齢：２４歳（見た目は）

身長：１７０センチメートル

体重：６７キログラム

特技：月詠を操ること。

趣味：月詠を操ること。鳳凰を苛めること。

さぁ、大体全員を出してみました。各務はまだ、ちゃんと出てきていないんですが、確か、１５話だったかな？　出てきてます。台詞だけ・・・。

プロフィール（後書き）

これから、キャラが増えたら、余裕が出来次第書き足していきます。

記憶１７（前書き）

皆でお掃除前篇。

記憶17

月詠が来て数週間目。現在大勢で紫苑の部屋のコピーに住んでいる。

「皆さん、たまには掃除しましょうよ」

「すまん、紫苑此処には掃除・・・、もとい家事出来る奴が居ない」

「・・・・・・桜花ちゃんと楼華ちゃんは・・・？」

『済みません・・・・・・。出来ません』

「そっか・・・。しょうがない。俺がやるか・・・・・・」

『『『「「！！？　紫苑（様）がやる必要は（ない・ありません）！　俺（私）共が（やります・やる）！！」」』』』

「・・・・・・そう・・・？　なら、俺出掛けるから出来たらその間にやっといてくれる？」

『『『「・・・で・・・・・・出来たら（やる・やります）・・・・・・」』』』

「よろしくね？」

紫苑はそう言って部屋を出た。

何かやっぱ心配だなぁ・・・。

紫苑はそう思いながらも階段を下り出掛けた。

記憶１７（後書き）

前後篇にしてみました。
次更新するのが後篇か、下手したら中編になってしまうかもしれません。

記憶18

「さて・・・、紫苑が帰ってくるまでにやると言ったが、どうするんだ・・・？　此れ・・・」

『『『ですよねー・・・・・・・・』』』

「ハァーーーー」

狼は盛大に溜息を吐いた。

本当にどうしようか・・・。見栄を張らなければよかった・・・・・・。

狼とその他もそう思った。

紫苑が出掛けてから三十分後。皆はただ、ただ立ち尽くしていた。力弥と力斗はしびれを切らしたように動き出した。次に羅宇と璃宇、次に狼、最後に桜花と楼華が動き始めた。その他鳳凰、鸞凰、江、瑙、月詠、月詠の付き人である相模各務（さがみかがみ）はベットの上に移動し傍観していた。

『『『『「・・・・・・・・・・・・・、月詠（様）は良いとして、何故皆々様方は働かないん（だ・ですか）・・・・・・？」』』』』

『『「働かなきゃ駄目なの（か・ですか）・・・？」』』

『『『『「働（け・いて下さい）」』』』』

『『「えーーーーーーー・・・」』』

物凄いブーイングが来た。

『『『『「えーーーーーーー、じゃ（ない・ありません）」』』』』

「せめて各務だけでも働け」

狼は少し喧嘩腰になりながらも言った。すると各務はニコッと笑い言った。

「厭ですよ。何故狼何かに命令されなきゃいけないんですか。僕がお仕えしているのは月詠様で僕に命令していいのも月詠様だけです」
各務の言ったことに狼は額に青筋を浮かべた。羅宇と璃宇は少し冷汗を背中にかきながら、作業を続けた。
「あぁぁ～・・・そうかよ・・・・・・」
そんな狼を見た月詠は流石にヤバいなと思い、各務に命令をした。
「各務、お前も働け。実際お前は掃除は出来るだろ？」
「はい。何時も誰が貴方の部屋を掃除していると思っているんですか・・・？」
「そうだな」
各務は命令された通り、動いて掃除を始めた。

記憶１８（後書き）

此処で終了ー。
前中後編になります。
今度更新するので。

記憶１９

「・・・・・・、最近、二階が騒がしいね・・・・・・・・・・・」
「え？　そうかしら・・・・・・・？」
「うん」
架苑は悪辣に笑った。

「大体終わったな。最初っから各務に頼めばよかった・・・・・・」
「ですから僕は月詠様の命令しか聞きません。で、命令されてからやったんじゃないですか」
「だな・・・・・・」
狼は各務に苦笑した。微妙に話しが合うのはなんだかんだ言って、各務だ。結構天然だが、話をすれば普通に返事が返ってくるし。
「じゃあ、後は紫苑様を待つだけなのですか？　でしたら、御茶などご用意しなくては・・・」
「大丈夫、もう帰ってきてる」
『『『『「「「！！？　紫苑（様）！！」」」』』』』
「や、凄い綺麗になってるね。これ各務さんがやったんでしょ？掃除得意なんですね」
「はい。何時も月詠様の汚れた御部屋を掃除しているのは僕ですから」
「汚いんだ・・・、月詠さんの部屋・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「間、間が長いです。月詠さん」
「ま、まぁ、微妙に汚いかな？　うん、少しだけ、汚い」
『『『『『「「（いえ・いや）物凄く汚い（です・ぞ）月詠（様）

の部屋は・・・・・・・」」『『『『『『
「言うなぁーーーーー！！」
「己の所為だ、諦めろ、月詠」
「うぅ・・・、私刑（リンチ）だぁ・・・。皆で・・・、部下の分際で上司を私刑にしやがてぇ・・・」
「ハッ！」
「鼻で笑われたッ！！　（ズーン・・・）」
「あーあ・・・」
月詠は完全にいじけた。部屋の隅っこに行き、「の」の字を指で描いている。
「さて、俺ちょっと買い物してくる・・・。皆なんか欲しいもん有るか？」
『『『『「「特に（ない・ありません）」」『『『『』』
「判った。じゃ、行ってくる」
「行ってらっしゃい、狼」
狼は紫苑に微笑みかけ部屋を出て行った。

「よし、これでいいだろ・・・・・・」
狼は自分の買いたいものを買い終え、帰り道をのろのろと歩いていた。
「ねぇねぇ、剣王狼サマー。姫とは仲良くしてんのー？」
「！？　誰だ！」
「はーい、僕でーす！　今は女だから判んないでしょ？　覚えてるかなぁ？　嘉袁（かおん）だよー」
「！　お前・・・！」
「流石に名前は覚えてるよねぇ・・・だって・・・・・・」
嘉袁は一呼吸置いてから口を開き言った。
「僕が『原因』で姫をなくしちゃったんだもんねぇ・・・」

嘉袁は人懐っこい笑顔で言った。それは余りにも、今の狼にとっては残酷な言葉。

姫・・・、つまり『紫苑』を・・・最愛の恋人『ムラサキ』を失った・・・・・・。

それは、今目の前に居る、無邪気な笑顔を浮かべている少年によってだ・・・。

「でも、僕はただの『原因』でしかない。姫が死んじゃったのは僕の所為。だけど、本当に姫を殺したのは僕じゃない。本当は・・・・・・」

狼は目を見開いた。

「それ以上・・・、それ以上言うな・・・・・・」

「殺したのは・・・」

「言うなぁッ！！」

「紫苑様を殺したのは、他でもない、君だよ。狼・・・・・・」

刻(とき)が・・・、戻ればいい・・・・・・。

何時も、痛切に思っていた願い・・・・・・。

だけど、それは叶わない願いだと、知っていた――――――。

記憶１９（後書き）

衝撃の展開。
こういうの大好きです。

記憶２０

――――――「大丈夫。私は貴方がこんなことするなんて、無いと知っているわ・・・。だから、貴方がそんなに泣かなくていいの・・・」

「紫苑・・・、紫苑・・・！」

「あはははははははははっ！　滑稽（こっけい）だね！！　今、紫苑様が覚えてないからって、傍に居てさ！　紫苑様が覚醒したら、意味無いのに！！」

「――――っ！！　黙れっ！！　それ以上口を開くな！！」

「厭。喋る」

「・・・・・・・・・・・・・」

狼は嘉袁を睨みつけた。嘉袁は悪辣に笑った。

「きゃはははははははははっ！！！！！　本当に面白いね！　君は何時まで紫苑様に『甘えて』いるのさ！！　そんなんだと、完全に皆に見捨てられるよ！　くすくすくすくすくす・・・」

「黙れと・・・・・・、言った！！」

ブワァ！　と、風が起こった。嘉袁は其の風をヒョイ、と避けた。

「ちっ・・・！」

「さぁ、剣王狼。僕を満足させて。戦って、僕を満足させてよ・・・！　君は強いし、だから、僕と戦う事を赦してあげるしぃ」

嘉袁は空中にふよふよと浮いていた。

「っざっけんな！　お前なんかに赦しをもらわなくても、勝手に戦ってやる・・！」

「結構。じゃ、システム展開！　バトルフィールド！！」

嘉袁がそう叫ぶと一気に景色が変わり、モノトーンを基調とした、

世界に変わった。
「ふーん、そっちもフィールドだと、服装変わるんだ・・・・・・・。かっこいいね。其の服装！！　モノクロ！　いーなぁ・・・。僕は王様が「ピンクでいいだろ」とか言って、ピンクにしちゃったんだよねぇ・・・」
「似合ってんだしいだろ」
「わぁ、ありがと！　さて、初めよっか。
『斬り裂け。』
そして、僕に美しい赤い薔薇を頂戴・・・・・・・」
「誰が、やっかよ！！
『弾け！　全ての攻撃！』
そっちが薔薇でも咲かせてろ・・・！」
嘉袁が発した攻撃は狼の結界によって、弾かれ、キィィィィン！　という、甲高い音をたてた。
「ヒュゥー。さっすが、剣王でもあって、魔術王なだけあるね。だから、君を王様は欲しがってるんだよね・・・」
「誰がそっちに行くか・・・よ！！」
「わぁ、ちょ、反則！！」
狼は煙幕がはている間に移動し、嘉袁を斬りつけようとしたが、間一髪のところで避けられた。
「ちっ・・・！」
「君、反則王でもあるでしょ・・・」
「知るかよ・・・。と言うか、何でもかんでも『王』を付ければいいってもんじゃねぇんだが・・・」
「それは、君にそういう呼称を付けた人たちに言ってよ」
「誰だ？」
「それを敵に聞くんだ？　と言うか、さっきの緊迫な雰囲気をどっかにやんないでよ」
「・・・・・・・・・・・・・。そうだな」
狼はあっさりと同意したので、嘉袁は肩を項垂れた。

「なんか、気が抜けるなぁ・・・」

記憶２０（後書き）

シリアス・・・何だよね？

是・・・。（（誰に聞いてんだ、自分・・・。

記憶21

「・・・・・・狼・・・・？」
紫苑は其の名を呼んだ後、悪寒を覚えた。
――――厭な予感が・・・する・・・・・・・。
「――――！！　狼！？　狼が危ない！！」
「！？　紫苑？　狼がどうしたって！！？」
「フィールドが・・・、戦闘が、始まった！　今すぐ、扉を開いて！　月詠！！」
「――――ッ！！？」
「・・・って、済みません！　タメ口になってしまって・・・！」
「否、いい・・・」
月詠は紫苑に手を上げ、顔を片方の手で覆った。

『半覚醒』と言うのは、本当らしいな・・・・・・・。だが、『刻』はまだ後先・・・。完全なる『覚醒』はまだだ・・・・・・・。

「判った。紫苑、それはどうしてそう思った・・・？」
「・・・・・・、判りません。ですが、何か、頭の中に、警鐘の様に、響く。狼の危険を知らせるような・・・・・・」
「成程。ならば、その言葉を信じよう。
『我が名は月詠。此の名のもとへ、我の意に従い、今すぐ現れよ、『漆黒の扉』！』」
月詠が言い終わると同時に、漆黒の鎖に封印された様に、巻きつかれている、扉が現れた。月詠は其の現れた扉にトン、と触れた。

すると鎖がバキィィと音を立て、壊れていった。
「うわぁお・・・・・・。凄・・・・」
「さ、行こうか。皆・・・」
『『『『『「はい」』』』』』』
「紫苑・・・、どうする？」
紫苑はすぐには応えられなかった。だって、怖いから。下手したら、傷ついた狼を見ることになる様で・・・・・・・。
それでも・・・・・・。
「行きます。俺も、行きます！」
紫苑は月詠に面と向かって言った。月詠はフッと笑い手を差し伸べた。
「上等だ。流石、我らの姫だ」
「姫は止めて下さい。姫は」
そう言いながら、紫苑は手をとった。

「なんかさぁ・・・、これは、フェアじゃ無い気がするんだよねぇ・・・・・」
「何がだ？」
「それだよ！　何で君は息切れてないのさ！！　しかも無傷！　何で僕だけ傷だらけで、息切らしてんのさ！！」
「知るか。」
今、嘉袁が言った通り、狼は全くの無傷である。何故なら、嘉袁が放った攻撃を、弾き返し、時たま、剣を振りかざして、当てていたので、殆んど怪我をしているのは嘉袁だけだ。
「あーあ、服もボロボロ。厭だと言っても、是は王様が提供してくれたやつだしなぁ・・・。ま、いいや。服を変えてもらおっと」
「ふん。そうしてもらえ」

実際、狼もそれなりに体力を消耗している。何時まで続くか・・・・。

「さぁ、そろそろ多勢に無勢かな？」

「は？」

ドシュッ！！

突然目の前を矢が通過した。

「・・・・・・・・・・・は？」

「ほら、来た」

嘉袁が見据える場所には・・・・・・。紫苑達が居た。だが、紫苑は眼を見開いて、嘉袁を凝視していた。

「・・・紫苑・・・・・・？」

狼は紫苑が何時まで経ても、動かないので不審に思い、名前を呼んだ。

「ねえ・・・さん・・・・・・？」

「ッ！！？」

狼は紫苑の呟いた言葉に眼を見開いた。

今、紫苑は何と言った――――？

狼はバッと嘉袁に向き直った。すると嘉袁は悪辣にニィと笑った。

「ははっ。気づくのが遅いよ？　狼。そう、僕は現在（いま）、紫苑様の姉だよ。其の名を、架苑。気づかなかった？」

嘉袁の言葉に皆が騒然とした。

「今から、君は僕の敵だ。紫苑様・・・・・・」

紫苑はその言葉に力が抜けた。

裏切らないで、もう、自分の大切な人達が・・・、居なくなるのは、厭だ――――――。

記憶２１（後書き）

シリアス道まっしぐら。
私って・・・・・・。

記憶22

血が、滲(にじ)む――――。

紅く、咲き誇る薔薇の様に――――。

聞こえる声は、悲しみに満ちた、声。

――――『ムラサキ・・・、ムラサキ、起きて・・・・・・。起きて・・・、頼むから・・・。ムラサキッ!!!』

泣かないで、愛しい人――――――。

「さて、是じゃぁ僕に一切勝ち目無いし、此処は一旦(いったん)戻るよ。じゃぁね紫苑様」

「・・・っ! 姉さん!! 待って!」

紫苑は力いっぱいに手を伸ばした。だが、その手は届くことなく、崩れ落ちた。

「ねえ、さ・・・」

「紫苑!?」

紫苑は其のまま意識を手放した。

雨の、嫌いな雨の音が、聞こえる――――。

その音にまぎれて、誰かが叫んでいる。

其の声は、忘れもしない、愛おしい恋人、狼の声――――――。

紫苑が意識を失って、半日。狼達はどうしようもなかった。

前世で、『紫苑』死ぬ原因になった嘉袁が紫苑の姉として・・・、『架苑』として生まれ変わっていたなんて――――っ！

狼は気持ちが荒れていた。

確かに、直接『紫苑』を手に掛けたのは自分だ。しかし、其の時自分は意識を失っており、気づいたら、目の前に血を流した『紫苑』が居た。そして、すぐ傍に居た。嘉袁が――――。

――――――『君が殺したんだよ？　最愛の恋人を――――――』

狼は其の時、力が爆発し嘉袁を半殺しにした。それでも嘉袁は言った。

――――――『忘れるな、殺したのは君だから。まぁ、君を操って紫苑様を殺させてのは僕だけどね』

「狼・・・。そう言えば僕達って、『あの日』の事をよく知らない。だから、詳しく教えてくれない？」

力弥は言った。狼は眼を見開き、溜息を吐き、口を開いた。

「『あの日』、俺は戦いが終わったから、最期に一目だけでもと思い、ムラサキに会いに行った。俺はムラサキの部屋の前で気を失ったんだ・・・・・・。そして、起きたら・・・・」

紅い、赤い、一面に紅い血が・・・・。

「俺の目の前でムラサキは倒れた・・・・」

紅い血と、雨が、嫌いになったあの日、君を失った――――――。

記憶２２（後書き）

話が薄い。
なんてっこた！
だが、私の小説ってこんなもんですよね・・・。

記憶２３

飛び散ったものは、紅い、赤い血――――――。

咲き誇る、薔薇の如き紅い、赤い血――――――。

そして、倒れ行く、紫苑が居た。

ドサ・・・・。

「狼・・・・。狼、大丈夫、よ・・・・・・・。私は貴方がこんなことを、私を殺したりしないと、知っているから・・・・。私は貴方を信じてるから――――――」

夢であればいいと、是が悪夢であることを、ずっと、願っていた――――――。

「狼、あちらが動いてきた・・・・。紫苑を此処に置いておくことは出来ない。『あっち』へ連れていくぞ・・・・」

「判った。桜花、楼華、『扉』を開け・・・・・・」

『判りました。
『今繋ぐ全ての扉。今開ける異次元の扉。開けッ玄宗霧幽界！』』
狼は扉が開いたと同時に紫苑を抱きかかえた。
「ムラサキ・・・・・・」
規則正しい寝息を立てて寝ている紫苑に狼は顔をすりよせた。
「御免ね・・・ムラサキ・・・・・・ッ！」
「さぁ、行くぞ。皆、玄宗霧幽界へ・・・ッ！」
『『『『『「「ハイッ！」」』』』』』
皆で『扉』の中へ入って行った。

『お待ちしておりました。皆様』
「白銀、黒鉄、黄金。紫苑を狼から受けとって、部屋へ連れて行ってくれ」
『かしこまりました。狼様、紫苑様を――――』
「頼む」
狼はそう言って、黒鉄に紫苑を渡した。
「あ、そうだ。黄金、此処から力を飛ばして、『あっち』での紫苑の関係者の紫苑に関する記憶を消してくれ」
「仰せのままに」
黄金はひらりと踵を返し、何処かへ消えた。
「桜花と楼華は黒鉄と白銀と共に部屋に行って、紫苑を見ていてくれ」
『月詠様の意のままに』
「羅宇と璃宇は黄金の所に行け」
『かしこまりました』
「力弥と力斗と狼は俺と来い」
『判りました』

「判った・・・」
狼は紫苑を数分見つめ、月詠と共に神殿へ行った――――――。

記憶２３（後書き）

シリアスは突然やってくると、もう二度と消えない。
まぁ、書いている私が悪いんですが・・・。

記憶２４

どんな時でも、貴方を信じている――――――。

そう、『あの時』だって――――――。

カタンッ・・・。

「？　あ、狼ッ！　終わったのねッ・・・ってどうしたの・・・・・・？　ッ！　ろ・・・・・・、狼・・・？」

パタパタ・・・。

零れ落ちるは紅い、赤い、薔薇の如き紅き血――――――。

「狼・・・・・ッ！！」

「きゃはははははははははッ！！！！！！」

突然、笑い声がした。紫苑は顔を上げた。其処には茶髪の少年が居た。

「よくやったっ、狼ッ！　流石に狼には油断するよねぇ！」

「あ、貴方・・・ッ！！」

紫苑は唸りにも似た声で少年を見た。

「君は僕らにとっては脅威（きょうい）だからね。今のうちに殺しておかなきゃね・・・？」

「だからって・・・、狼を・・・・・・使うなん・・・て・・・・・・ッ！！」

「ムラ・・・サ・・・・・・キ・・・・？」
紫苑はゆっくり倒れた。ちょうど、狼が意識を取り戻し、顔を上げた。
「ッ！！？　ムラサキッ！」
ドサッ・・・・。
「ムラサキッ、ムラサキ起きてッ！！」
狼が紫苑の身体を揺する。でも、紫苑はゆっくりと意識が薄れてく。
言いたいことが・・・、言いたいことが沢山ある・・・・・・。
「ろ・・・う・・・・・・。貴方が悪くない・・・。貴方がこんな事をするとは、思ってないから・・・・・・。私を裏切るなんて、無いと知っているから・・・・・・。大丈夫よ・・・・・・・・・・・・」
紫苑はとうとう、息を引き取った・・・・・・・。

記憶２４（後書き）

紫苑達の過去編。
まだまだ続く・・・・・・。

記憶２５（前書き）

過去編終了。

記憶25

今、やるべきことは――――――。

「――――――・・・・・・あ」

紫苑はゆっくりと眼を開けた。すると、急に頭がズキッと痛くなった。痛みを堪えて、前を見た。紫苑は眼を見開いた。知らない場所、だったからだ。自分の部屋じゃない。コピーの部屋でもない。知らない場所。でも、覚えている気がした。此の部屋を。

「此処って・・・・」

そうだ・・・・。『自分』の部屋だ・・・・・・・。

懐かしい・・・・・・・。だけど、厭な記憶・・・・、自分にとってよくないことが此処で起こった様な・・・・・・・。

「何だっけ・・・・・・・？」

思い出せない。取り敢えず居間に行こう。そしたらきっと皆居るだろうから。

紫苑はベッドから下り、下へ行った。

「是で全てだ――――――」

狼は前を見据え、言った。自分が『紫苑』を殺した時の事をお皆に詳しく説明していた。

「そうか。どの道、狼は無実何だな・・・・・・・。ならよかった」

月詠はそう言って、ソファにもたれかかった。狼は月詠の言った事に怒りを覚えた。そして、怒鳴った。
「良い訳ねぇだろうが！　操られていても、俺がムラサキを殺したことに代わりねぇじゃねぇかッ！！」
「判っている。だが、お前に悪気があった訳じゃない。それに紫苑は今此処に『居る』。覚醒すれば、ちゃんと其の時のことを『紫苑』からも聞ける。『紫苑』がお前の所為じゃないと言うのは判っているが、『紫苑』はちゃんと真実を言うだろう・・・・・」
憤る狼に対して、月詠は努めて冷静に、言った。これでも月詠も動揺していた。此処に来て、初めて真実を語られた。狼は其の時動揺していて、よくは教えてくれなかった事実が今語られた。

敵側が関わっていたなんて――――――！！

月詠は顔を覆った。

「おい、嘉袁。何をしている」
低い、男の声が響く。其の声に嘉袁は振り向く。
「んー？　何してると思うー？」
「パズル」
男はスパっと答えた。嘉袁はニコッと笑い、言った。
「せいかーい。パズルしてるんだー。そう言えば、あっち側動き始めたよー？　『玄宗霧幽殿』に移動したよー」
「それぐらいメシアは気づいている」
「だーよねー」
嘉袁はクスクス笑い、歩き出した。
「そろそろ、戦うのよ・・・。紫苑・・・・・・『御免』ね・・・」
ぽそっとそう呟いた。

記憶２５（後書き）

久しぶりに更新です。
嘉袁ッて・・・。

記憶26

「あいつは『紛(まが)い者』だからな、よく見ておけ。下手したら裏切ることもある」
「仰せのままに・・・」
薄い色素の髪の男は顔を伏せ、其処を去った。大きい扉を開き、中に入ると、嘉袁が居た。
「あ、終わったの？　メシアはなんて言ってたのー？」
「特に言う必要もないだろう」
男は軽くあしらい、ソファにドカッと座った。
「ぷー。ケチー」
嘉袁は口を尖らせ、文句を言い、またテーブルに向った。
「・・・・・またパズルをしているのか？」
「うん。面白いからね。僕の一番大好きな人の写真をパズルにしたの」
「ストーカー、変態・・・」
男はぼそっと呟いた。嘉袁はそれを聞き逃さなかった。くるりと顔の向きをかえ、男を見た。
「酷い言い草だね・・・」
「・・・・・お前が其れほどの事を現在進行形でやっているんじゃないか」
「もう相手にしないもん」
嘉袁は不貞腐れ、部屋を出た。
「やっぱり、マークされるかなぁ・・・。此処に、居たら危険・・・・・かな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・此処・・・何処だろ・・・・」
紫苑は広い廊下のど真ん中でぽつんと佇んでいた。
「あー、意外と『覚えている』もんだと思っていたんだけどなー」
やっぱ、『中途半端』だなー。皆『半覚醒』って言っていたっけ？
「あ、ちょっと思い出した。確か・・・・」
そう呟いて、歩きだした。

「月詠様！　紫苑様が御部屋にいらっしゃらないんですが、知りませんか！？」
「！？　紫苑が居ない！？　何故だ、白銀っ！」
「判りません。御部屋に様子を見に行ったところ、何処にも居なかったのですっ！！」
狼は眼を見開き、歯噛みし、走り出した。
「狼っ！！」
月詠が声を上げたが、狼は気にせず走った。

「は、は、は・・・・・・・」
何処に行った・・・っ！　紫苑、無事で居てくれっ！！
狼は角を曲った。すると、人にぶつかった。
「うっわ・・・！」
「っ、悪い・・・！　って紫苑ッ！！」
「あ、狼。よかったー。人に会えたー」
紫苑は狼を見つけて、ほっと安堵した。その様子に、狼はほっと

したが、息を吸い、怒鳴った。
「っんの馬鹿っ！　いきなり消えたから心配したんだぞっ！！　どうして、部屋から出て行ったっ！？」
「えっと、その・・・御免・・・・・・。あそこ何か厭な感じがして・・・、それで皆の所に行きたくて・・・・・・。御免・・・ね・・・？」
「・・・・・・・っ！！」

――――――「厭な感じがして・・・」

それは当たり前だろう・・・。あそこは自分が・・・紫苑が死んだ場所だ。厭な感じがして当たり前だ。だから、狼はそれ以上怒る事が出来なかった。
「判った。取り敢えず、皆心配してるから、大広間に行こう・・・」
狼は先に歩き出し、紫苑は慌てて其の背を追いかけた。

――――――「紫苑は今此処に『居る』。覚醒すれば、真実が判る――――――」

それが・・・怖いんだよ・・・・・・・。一番・・・・・・・。

今、狼が恐れていることは、紫苑が『覚醒』し、全てを思い出すことだ――――――。

記憶２６（後書き）

さぁ、嘉袁はどうなるでしょう。
時々嘉袁がしているパズルが出てきます。
さぁ、パズルの写真は誰でしょう。

記憶27

「そろそろ出来そうかな・・・？　これ、誰にも見られないようにしなきゃ・・・」
嘉袁はそういうと、パズルを崩さぬよう、ゆっくり持ち、移動させた。
「・・・あれから、もう数百年は経ってるんだよねぇ・・・・・・」
自分が、紫苑を殺してから、数百年・・・。正確に覚えているが、それを思い出すと、厭なことまで思いだす事に成るから、云わない、思いださない。

彼女は自分のことを憎んでいるだろうか・・・？

憎んでるだろうに・・・、当たり前だ。自分は彼女を『裏切った』のだから・・・。

「・・・・・何であんなことしちゃったんだろ・・・」
嘉袁は自己嫌悪に陥り、ベッドに倒れるように寝っ転がった。そのまま、嘉袁は意識を手放した。

「ほんっっっっっっっっっっとに心配したんだぞッ！　紫苑！　これからは勝手に部屋から出ないでくれっ！！」
「御免なさい・・・。以後気を付けます、月詠さん・・・・・・」
気圧され、紫苑は引き攣った笑顔と共に返事をした。その様子に白銀は肩を震わせ、静かに笑っていた。

「し、失礼・・・しま、ぷふ・・・・！　失礼しまし、たぁ・・・プッ！　私は、白銀と言います・・・・・・。ぷぷ・・・」
「白銀・・・、お前後で顔貸せ・・・・・・」
「厭です」
「今なおるなよっ！！」
紫苑は白銀をじっと見た。綺麗な銀髪に金眼。髪は床に届く寸前で、瞳は大きく、少女の様な容貌である。
「月詠様、紫苑様は起きになったのでしょうか・・・？　って紫苑様、お久しぶりでございます。私は黄金と申します。覚えていらっしゃるでしょうか？」
黄金は金髪に黒眼。髪は肩にかかる位の長さで、瞳は少し細めている。男と女の様な抽象的な顔立ちをしているが、きっと男だろう。声は高めだが、桜花や楼華達と比べると低い。それに、身長も高い。きっと紫苑より高いか同じぐらいだろう。

「うっわ、美人・・・・・・」

紫苑はついつい、思っていたことを口に出していた。その言葉に、黄金は勢いよく膝をついた。紫苑は吃驚し、黄金に近付いた。
「え！？　ちょ、大丈夫ですか！？　俺何か云いましたぁ！！？」
「心配するな、紫苑。黄金は照れているだけだ」
「照れ・・・・・・？」
狼の云ったことに紫苑は小首を傾げた。狼は苦笑いをしながら、云った。
「お前が、「美人」と、黄金に向かって云ったろ？　その言葉に照れてるんだよ」
紫苑は眼を見開き、黄金を見た。黄金は確かに顔が紅くなっていた。それはもう、真っ赤に。
「な、成程・・・・・・」
「『我が君』に褒められるとは思ってなかったんだろ・・・」

「・・・な、成程・・・・・・」
「黄金は三つ子の中で一番地味な顔してるから、あんまりほめられたことがないんだよ」
「・・・・・・な、成程・・・って三つ子なのっ！！？」
紫苑は眼をむいて、狼を見た。狼は紫苑を一瞥し、言葉を続けた。
「ああ、黒鉄、白銀、黄金、で三つ子なんだよ。白銀が女で、黒鉄と黄金が男。皆、名前と髪の色が一緒なんだが、瞳だけは、違うんだよ・・・」
「（あ、本当に男だったんだ。よかった・・・・・・。）瞳の色が違うってどんなふうに？」
「白銀は銀髪金眼。黒鉄は黒髪銀眼。黄金は金髪黒眼、というように」
「成程・・・」
紫苑は白銀と黄金を見た。
「やっぱり、綺麗だなー、二人共・・・」

バタッ・・・！

紫苑がまた、声に出して云うと、今度は白銀までもが、膝をついて、顔を下げて、震えていた。
「・・・・・・何で？」
「黄金と同じだ。まさか自分まで紫苑に褒められるとは思ってなかったんだよ」
「・・・・・・・・・・・・な、成程・・・？」
最後の「成程」が疑問形になったが、気付いていない紫苑であった。

記憶２７（後書き）

楽しい、なつおもを書いているのは本当に面白いです・・・。
次回もお楽しみにー。

記憶２８

「うわぁ、三人並ぶと凄い迫力。皆、綺麗・・・！」
紫苑は眼を輝かせた。白銀、黒鉄、黄金が三人そろっているところを初めて・・・、久しぶりに見た、紫苑は「綺麗」だと、賛美しまくっている。三人は照れ臭そうに、顔を俯かせた。狼と月詠と各務はその様子に、三人が気の毒だ・・・、と思っていた。
「紫苑、其処までにしておけ。三人が可哀想だ・・・・・・」
「え？」
「そうだ、其の位にしとけ・・・。三人は余り褒められるのは慣れていない・・・」
「ほえ？」
「そうですよ、三人が気の毒です。まさか、『我が君』に褒められるなんて・・・、至極ですよ・・・」
「ほ、ほへ？」
「「「取り敢えず、褒めるのを（止めろ・止めなさい）」」」
「・・・、はーい・・・・・」
紫苑は三人を褒めるのを止めた。白銀達は、人知れず、安堵した。

「・・・雪・・・・・・？　此処にも雪が降るんだ・・・」
「ああ、此処にも四季はある。あっちと同じ『刻』を進んでいるからな・・・・・」
ゆらゆらと、雪が舞い落ちてきている。綺麗で、冬の桜の様だ。紫苑は今まで見てきた雪と少し違うので、見惚れていた。
「薄い桃色だ・・・・・。だから、桜みたいに見えたんだ・・・」
雪が、手の中に舞いおりた。それは、人肌に触れると一瞬にして、溶けて消えた。
「綺麗だ・・・・・」

「お前は誰かれ、何にでも『綺麗』だと言うんだな・・・」
狼は紫苑を見た。その嬉しそうな横顔は『紫苑』そのものだ。彼女も、雪が降るたんびに、喜んでいた。雪の中駆け回っては、何もないところで躓き、雪の中に埋もれていた。流石にあれは笑えた。大笑いした覚えがある。
「ムラサキは雪が降っていたら、喜んで転んでいたぞ・・・・・・」
「俺はそんなことしないと思うけど・・・」
紫苑はじとっと狼を睨んだ。とたんに、狼が笑いだし、紫苑もつられて笑いだした。

雪、それは、冬の桜の如き、桃色――――。

狼には、それが血にも見えて、仕方が無い――――。

記憶２８（後書き）

季節が巡り、また、紫苑と・・・、ムラサキと雪を見れるだろうか――――？

彼女の笑顔が傍にあるだろうか――――？

記憶29

「舞い・・・？」
「そ、舞い。せっかくこの季節に来たんだし、神楽を舞ってみてはどうだ？」
月詠は指を一本たて、紫苑に云った。

毎年、この季節には、選ばれた者が神楽を舞うことになっており、丁度いい時期に来たので、紫苑も舞ってみてはどうだ、と提案してきたのだ。
「去年は江と瑙が舞ったんだ。それはそれは綺麗なものだった・・・」
「わー、見てみたかったー・・・」
「「紫苑が見るほどのものじゃ無いっ！」」
江と瑙は顔を真っ赤にして、叫んだ。紫苑はきょとんとしたが、眼を潤ませ、云った。
「そんな・・・俺は見ちゃいけないものなの・・・？」
「「う・・・っ！」」
狼と月詠と各務は肩を震わせながら、力弥と力斗は床に突っ伏しながら、桜花と楼華と鳳凰を鸞凰は声を上げながら、白銀と黒鉄と黄金は無表情を保ちながら、笑った。
「あれ？　何で皆笑ってんの・・・？」

紫苑、自覚なし。
「「天然・・・！」」
江と瑙は唸った。

舞いの稽古（けいこ）にて、皆、唖然としていた。
「ふぅ・・・。こんなもんですか？」
『『『『「「「覚えるの速過ぎ（るから・ます）ッ！！！！！！」」」』』』』
「ほへ！？」
紫苑に舞いの手本を見せたには数十分前。そして、もう完全に舞いを覚えていた。
「うん、ま。面白いし、興味もあったしね？　速く覚えたほうがいいかなって、思って・・・・・・」
『『『『「「「それにしたって速い（わ・です）ッッ！！！」」」』』』』
「皆さんよく、ハモりますね・・・。ホント吃驚・・・・・・」

記憶２９（後書き）

楽しいなー。
書いてるのー。

記憶３０

「季節というものは、ときに邪魔にもなるな・・・」
「メシア、何をいきなり？」
嘉袁は『メシア』と呼んだ男を見た。男は嘉袁を一瞥し言葉を続ける。
「特に、冬は厄介だ。雪の所為で前が見えんからな・・・」
「あー、それは納得かな？　メシアは季節で何が好きなの？」
こてん、と首を傾げながら聞いた。男は少し思案して、答えた。
「・・・冬、だな。次に春」
「・・・・・・雪は嫌いなのに？」
「ああ。雪と冬は別物だ」
嘉袁は男をうろんげな顔で見た。矛盾している、此の男は。
「何で冬が好きなの？」
「・・・・・・秘密だ」
男は指を立て、微笑みながら、云った。不覚にも、その仕草が可愛いと思った嘉袁であった。

俺が冬を好きな理由。
それは――――――
『彼女』と初めて会ったのが、冬だったからだ――――――。

「何だ、此の写真・・・・・・。月詠さん・・・・・・・？」
隣に自分と同じ顔した、女性が写っていた。
「これが、前世の俺・・・？」
話で似ていると聞くが、此処まで似てるとは思っていなかった。

・・・此処まで似てると、不気味に感じてくるな・・・・・・。

紫苑は写真を見ながらそう思った。
「紫苑、何見てるの？」
「！？　う、わ吃驚したー。狼か・・・」
「其処まで吃驚されると、ショック・・・」
「御免」
ズーンと音が出そうな程落ち込んだ狼の頭を紫苑は微笑みながら撫でた。

「・・・で、何見てたの？　写真・・・・・・？」
「そ、なんか本棚弄ってたら出てきた。」
紫苑は狼に見せた。狼は写真を見たとたん、眼を見開いた。
「こ、れ・・・・・・。何で、こいつが・・・・・・！？」
「・・・？　どうしたの？狼・・・・・・」
「あ、と・・・。その・・・・・・」
何時もより歯切れの悪い狼。
「紫苑、是貰っていい？　月詠に見せなきゃ・・・！」
「あ、うん・・・。いいけど・・・・・・」
「有難う、紫苑・・・」
狼は浅く笑い、写真を持って走り出した。

「なんで本人に見せるんだろ・・・・・・・？」

「月詠ッ！　此の写真を見ろ！！」
いきなり狼が息を切らしながら部屋に入ってきた。
「何だ、何の写真だ・・・？　これ・・・っ！」
写真を見て、月詠は眼を見開いた。
「これ、何処にあった・・・！？」
「紫苑の・・・ムラサキの部屋だ・・・・・・」
「な、んで・・・姫が、こいつの写真を・・・・・・！？　しかも、一緒に写っている・・・・・・」

其処に写っているのは、藍色の髪に、紅色の瞳。顔は月詠と瓜二つ。

名を、月臣（つきおみ）。

存在を隠され続けた、双子の兄――――――。

記憶３０（後書き）

急展開。
と、いうか、また双子・・・。
済みませんでした！

記憶３１

眼を、閉じれば、あの姿を思い出す――――――。

「メーシア！　いい加減、起きたら？　世琶（せいは）が怒ってる。それと、メシアの事、呼んでる」
「世琶が・・・？　判った、今行く・・・・・・」
男は背中を覆う程の長さの髪を適当に括り、前髪を掻きあげながら、部屋を出た。

「遅い。何をしていた・・・・・・」
「寝ていた。悪かったな・・・・・・」
世琶は溜息をつき、男の額に指弾した。それも・・・

ズダンッ！！！！

音が恐ろしかった。
「痛いぞ、世琶」
「当たり前だ。痛くしたのだから・・・・・・」
男は額をさすった。相当痛かったらしい。世琶は流石に罪悪感が生まれ、額を見た。
「・・・大丈夫、か？　済まん、強くし過ぎた・・・」
「ま、是位、大丈夫だ。気にするな」
「じゃ、気にしない」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

男は世琶をじとっと睨んだ。が、世琶は構った様子もなく、話し始めた。

「何時になったら、あちらに攻撃をしかけるんだ？　もう、あいつらは『玄宗霧幽殿』に移っているだろう」

「其の事か・・・・・・。大丈夫だ。まず、蜻蛉（かげろう）にあっちの様子を見てもらう。油断しているようなら、攻撃をしかける」

月臣は欠伸（あくび）をしながら云った。準備は万端（ばんたん）だ、と。

「そうか・・・。ところで、其の蜻蛉は？」

「・・・・・見ていない。此処最近見ていない・・・・・・・・・・・」

「・・・何処に行きおった、あの馬鹿は・・・・・・」

世琶は唸るようにそれを云い、踵を返した。

バラバラ・・・。

紙が沢山落ちてきた。それは写真だった。

「わー、俺だんだけ月詠さんと写真撮ってんだ・・・・・・？　確か百年位前だって云ってたっけ・・・？　此処は技術が発展してんな・・・」

百年前でも、カラー写真など無いだろう。

「あれ？　よくよく見てみれば、瞳の色が違う・・・・・・」

月詠は緑色。此の写真に写っている青年は紅色だ。

「これ、誰だっけ・・・・・・？」

思い出せそうで、思い出せない。

「・・・月、臣・・・・・・・？」

其の名は、呪いの名。

唱えては、いけない

名前だった――――――――。

男は眼を見開き、外を見る。涙が出そうになった。

「紫苑・・・・・・。やっと、其の名を・・・・・・・」

唱えてくれた――――――――。

記憶３１（後書き）

次は、多分月臣と紫苑の出会いの話です。
お楽しみを・・・。

記憶32

彼女に会ったのは、淡い桃色の雪が降る頃だった――――――。

鈴の音が、微(かすか)かに聞こえた。

どうにか抜けだし、其の方へ行ってみると、綺麗な着物を身に纏った、女が居た。

腰のあたりまで長い髪が動きに合わせて揺れていた。

扇子を右手に、左手に鈴のついた杖を持って、舞いを踊っていた。

「綺麗だ・・・・・・」

俺がそう呟いたのが聞こえたのか、女は此方に振り向こうとし、足を挫き、転んだ。

「・・・大丈・・・夫か・・・・・・・・？」

「大丈夫に見えるかしら・・・・・・・・？」

「いや・・・・・・」

「なら云わないで・・・・・・」

「・・・・・・そうだな・・・・・・・」

最初の会話が、これだった。

今思い出しても笑える。

おれから、紫苑とはちょくちょく逢うようになった。

「貴方は存在を隠されているのね・・・・・・。篁家は未だに双子

の長子が不吉を呼び込むと云っているのね・・・」
「ああ・・・。だから、お前も今は大丈夫かも知れんが、後から不吉な事が起こるぞ・・・・・・」
俺が云うと、紫苑は笑った。
「大丈夫よ。そんなの迷信だもの。信じたりしていないもの・・・・・・」

その言葉が、どれだけ俺を救ったことか・・・・・・。

もう、紫苑から眼を離せなくなった――――――。

ある日、誰にもばれぬ様、庭を散歩している時、紫苑を見かけた。
だから、声をかけようとしたんだ・・・・・・出来なかった。
「狼、駄目よ・・・。こんなところで・・・・・・」

其処には、俺の知らない男と口づけを交わしている紫苑が居た。
自分等はもうとっくに両想いだと思っていた・・・。

だけど、違った・・・・・・。

ふと、俺はこう思ってしまった。

俺のモノに、ならないのなら・・・・・・

殺してしまおう――――――――――――。

記憶３３

「――――――・・・・・・。ホント、馬鹿なこと、考えたよな・・・・・・・・・・・・」

前髪を掻き上げ、次に其の手で顔を覆う。

後悔して、自分を呪いたくなった。

――――――――「貴方は悪くない。あれは僕がやったことだ。だから、貴方が自分を呪うことは無い」

嘉袁はそう云った。己が悪いから、己があの姫を殺したから、俺は悪くないと・・・。

「んな訳、無いだろ・・・！」

全部、俺が悪い。俺があんなことを考えなきゃ、あいつは愛する紫苑を殺さなくて済んだ。

嘉袁は閉じ込められていた俺に食事などを持ってきた側近のようなものだった。唯一俺が心を赦せた者だった。

――――――――「貴方も姫様の事が好きなんですか？　実は、僕も好きなんです・・・・・・。あのお方の傍にいると、心が落ち着くんです」

それは、俺も同じだった。落ち着いて、愛おしくなって、考えると、奥が苦しくなった。紫苑に対する感情は心地いいものだった。

――――――――――「月臣、貴方は大切な人は居るの？」

そう聞いてきた紫苑。余りにも無邪気過ぎる質問に動揺し過ぎてからかわれた覚えがある。

あの時の、紫苑の笑顔をもう一度・・・見たい・・・・・・。

「・・・月臣・・・・・・。月、臣・・・」

紫苑はその言葉を連呼した。其の瞳は、濡れていた。

「月・・・臣ぃ・・・・・・！」

過去の、私の愛しい人・・・・・・。

だけど、貴方を狼以上に愛す事が出来なかった・・・・・・。

「こんな私を・・・赦して・・・・・・・月臣・・・・ッ」

其のまま紫苑は崩れ落ちた。

記憶３４

あれから紫苑が部屋から出てこない。心配になり狼は紫苑の部屋へ行く。
扉の前に着き、ノックをする。
「紫苑、起きてるか？」
声をかける。だが、返事がない。

可笑しい、部屋から出ていないはずだ。なのに、何故返事が無い・・・？

狼は眉間に皺を寄せ、さっきより強く扉を叩く。
「紫苑ッ！　居るのか！？　居たら返事をしろッ！！　紫苑ッ」
これだけ大きな声を出しているのに返事がない。狼は歯噛みをし、扉をこじ開ける。
其処には、本棚の前で倒れている紫苑が居る。狼は血相をかえ、紫苑の身体を起こす。
「紫苑、起きろッ！　紫苑ッ、起きてくれッ！　・・・ッ・・・・・・・紫苑・・・ッ！！」
最後は涙ぐんだ声になった。

あれからすぐに白銀が着て、紫苑をベッドへ移動させ、寝かせた。
狼はベッドの横で座っていた。
「紫苑・・・・・・ッ」
狼は唸るように其の名を云った。それに反応したように、紫苑の瞼が震えたが、起きることは無く、代わりに、ある名を云った。

「・・・月、臣・・・・・・・」

眼を見開く。

「な、んで・・・・・・其の名を・・・・・・・・・・」

狼は椅子から離れ、壁に背をつく。

なんで、こんなときに俺じゃ無くて、其の呪われた名前を云うんだ・・・・！？

「ムラサキ・・・・・・お前の中に、まだそいつが・・・居るの、か・・・・・・？」

狼はそう云って、部屋を出た。

ムラサキ、ムラサキ・・・・・・。

何時か云っていた。

――――――「御免なさい、私は・・・月臣を愛してしまった・・・。だけど、貴方程じゃないの・・・・・・。でも、愛してしまったの・・・・・・」

愛してしまったと、云っていた。

それから、月臣とは逢わないと・・・もう二度と逢わないと云っていた。

「それを、信じた俺が馬鹿だった・・・・・・かな？」

狼は悪辣に笑った。

記憶３４（後書き）

物凄い展開になった。

記憶35

君の、愛情は誰に向いている――――――？

狼はふらふらと中庭を歩く。雨が、降っている。
「何で、此の世界(ばしょ)は雨が紅色なのかな・・・・・・？」
この雨を、見る度に血を思い出す。あの、忌(いま)わしい紅い血を――――――。
「悩んで、いても・・・無駄かな？　直接、聞くか・・・・・・」
紫苑・・・・・・ムラサキ、君の愛情、恋情は誰に向いている？
狼は拳を握り、紫苑の部屋へと行った。

浅いノック音が部屋に木霊した。紫苑はその音で眼が覚めた。
「紫苑？　起きてる？　入るよ」
「・・・狼？　うん、起きた。入っていいよ」
紫苑の返事を聞き、狼は部屋へと入る。
「紫苑、単刀直入(たんとうちょくにゅう)に聞く。紫苑、君は俺を愛している？」
「え・・・・・・？」

紫苑は眼を見開く。
「紫苑、君の愛情は誰に向いているの？　君の中に月臣はまだ居るの？　君を、ムラサキとしてじゃなくて、紫苑として聞く。紫苑、俺の事が・・・好き？」
「狼」
「お願い、答えて！」
狼は痛切に叫んだ。紫苑は静かに狼と対峙する。

「狼。俺はきっと、狼を愛していると思う。きっと俺の中に月臣が居たとしても、俺は狼を愛していると思う。これは、お前のムラサキも一緒だ」

「紫苑・・・・・・！」
狼はたまらず、紫苑を抱きしめる。
「狼、俺は『覚醒』して、お前のムラサキになっても、お前を裏切らない。お前を・・・もう一人にしたりしない」
その言葉に、狼は眼を見開く。
「紫苑、もうって・・・・・・」
「知ってる。お前達・・・・・・狼達は・・・・・・・・・」
言葉を一旦区切る。そして、紫苑は狼を見つめる。

「狼達は、『あの日』から・・・ずっと生き続けてるって・・・・・・。知ってる」

玄宗霧幽殿の住人は、不老不死である。

それは、たとえ、どんなことがあろうとも、覆(くつがえ)されない、事実――――――。

記憶３５（後書き）

此の話は、私も意味が判らなくなります。

記憶３６

玄宗霧幽殿の住人は、皆不老不死である。

だが、ある日、異例の子が生まれた。

それが、魏凰紫苑（ぎおう）である。

不老不死は、怪我の治りが早いのだが、その分身体に激痛が走る。

それが、此の娘には無かった。

普通の人間の様に傷が治り。普通の人間の様に老いて行く。

此処の者は、老い方には二通りある。

一つは、一通り成長し、止まる者。

一つは、遅く成長する者。

それは、人それぞれである。

「俺は、異例の子供だったんだろ・・・？　皆は不老不死なのに、俺だけが・・・・・・前世の俺だけが、普通の人間をして生まれた・

・・・・・・」
「紫苑・・・・・・・」
紫苑の顔は、今、苦渋(くじゅう)に歪んでいた。
自分だけが、違う。
そんな紫苑の感情が、見て取れる。
「なんで、俺だけ・・・・・・・」
「紫苑ッ！」
狼は紫苑の名を叫ぶように呼び、抱き締めた。
「ろ、う・・・・・・？」
「大丈夫だから、大丈夫だから・・・・・・。自分を、責めないで・・・・・・」
叫んだ。其の声は悲しみが混じっている。涙声にも近しかった。
「責め、る・・・・・・？　俺はただ・・・・」
「じゃ、自分を嫌わないで。自分を否定しないで」
「狼・・・・・・」
「これは、君の過去の口癖だ。
自分を、否定するのは、いけないことだって。
自分を受け入れなきゃ、いけないって。
どんなことが起きようと、絶対に自分だけは、裏切っちゃいけないって・・・・・・。君が、ムラサキが何時も云っていた事だよ！」
「・・・・・・・ッ！！」
どんな事が起きようと、他人が己を裏切りようと、己だけは、己の信じる道を、己を裏切ってはならない。
「絶対だよ、紫苑。自分だけは、自分を裏切ったらいけない。何時、どんな時でも信じるべきだって。紫苑、君が云っていたんだ・・・・

・・・！」
瞳が、濡れる。視界が、歪む。ぽたり、ぽたりと、涙がこぼれる。
紫苑の、黒曜石の様な黒い瞳が、涙であふれていた。
「紫苑、御免。お願いだから、泣かないでほしいな・・・・・・」
「ん、ごめ・・・・・・、でも、涙は簡単におさまらない・・・・・・」
「・・・知ってる・・・・・・。だけど、これからは、余り、泣かないでほしいな」
狼は優しく紫苑の頭を撫でる。紫苑はそれに答えるように、微笑みかける。

記憶３６（後書き）

男同士の告白大会に引き続き・・・・・。
私って・・・・・。
王道ファンタジーを、私に！

記憶37

「君等、男同士で告白って・・・、大胆だねぇ・・・・・・」
月詠がニヤニヤと笑いながら部屋に入ってきた。紫苑と狼はその場で固まった。
「紫苑。それは『覚醒』してから、やるべきだよ？　今のままだと、皆から同性愛者（ホモセクシュアル）だと思われるよ？」
飄々と月詠が云う。狼はゆっくりと立ち、片手を天へと翳した。
「ん？　どうした、狼。ロクサスを出して・・・・・・、おい、待て！　まさか、お前・・・・・・！」

「其のまさかだ！　コンのボケなすがぁ――――――ッ！！」

狼は勢いよくロクサスを振りかざし、月詠に渾身の一撃をぶっ放した。
「ノ〝オォ――――――――――ッッッッ！！！！！」
紫苑はただそれを呆然と見つめていた。

その後、紫苑の様子を見に来た楼華によって、月詠は助かった。
「狼、月詠様は『仮』にも、貴方の上司なのよ？」
「楼華、その『仮』のもって言葉に傷ついた。俺はその言葉に傷ついた」
「・・・気の所為です、月詠様」
「最初の間は何だ、その間は！！」
月詠は楼華に叫んだ。楼華は少し眼を背ける。
「楼華・・・・・・」

「では、失礼いたします」
「おい――――――ッッ！！」
月詠は叫んだが、楼華は苦笑いして、出て行った。
「俺に、俺に味方は居ないのか・・・？　居ないのか――――――ッ！？」
「「いないんじゃない（か・の）？」」
「畜生――――――ッ！」
しくしく泣く月詠を余所に、紫苑と狼は楼華にいれた茶をすすった。
「「・・・・・・渋い、（な・ね）・・・・・・・・・」」

淡い桃色の雪。それが、今、血へと変わる――――。

「「「ッ！！？」」」

地震が、起こった。
「なに、此の地震・・・！　どう考えったって、自然のモノじゃ、無いッ！！」
其の時、声が聞こえた。
――――「紫苑・・・・・・」
紫苑は眼を見開く。聞こえた声は、覚えのあるものだった。
「「月、臣・・・・・・？」」

声が、重なった。

其の声は、女の声だった・・・・・・。

記憶３８

「迎えに来たよ、俺の愛しい紫苑・・・・・・」

今度は、誰にも譲らない――――。

地震は止んだ。紫苑は止んだと同時に部屋を飛び出した。

「紫苑ッ！？　何処に・・・！！」

紫苑は狼の呼びかけを無視し、ただ走った。

「メシアー、紫苑様って、何処に居るのー？」

「・・・判らない。探してきて。見つけたら、捕まえて」

「了解ー」

嘉袁は片手を頭の横に上げ、紫苑を探しに行った。

「さて、蜻蛉と世琶は、邪魔が入ると思うから、それをぶちのめして」

「「りょーかい」」

二人はニヤリを笑い、得物を構え、消えた。

「紫苑・・・今度は、俺が君を『ムラサキ』と、呼びたいな・・・・・・」

狼のみが赦された言霊。

言霊を今度は俺が――――――。

雪が、降っている。淡い桃色の雪が。
それが、今、残酷な、血へと変貌(へんぼう)する――――。

「ッ・・・月臣・・・・・・・ッ！！」
其の声に、月臣は眼を瞠る。其の声は、記憶に残っているのより、少し低めの声。
「・・・紫、苑・・・・・・・？　紫苑、なのか・・・・？」
目の前に、居るのは。

茶色の髪。

濡れた様な黒曜の瞳。

綺麗な磁器の様な白い風貌。

記憶に、残っている、『紫苑』其の物だ。

あの時と、変わらない姿。
最期に見たのは、己の血で濡れた女体。
息絶え絶えで、それでも、必死に起きようと、していた。

そんな紫苑は、俺を、見て、睨んだ。

あの瞳を、忘れた事は、無かった。

「月臣、今、此処で・・・・・・」
月臣は其の声で我に返った。
「・・・紫苑・・・・・・・？」
「今此処で、貴方との縁（えにし）を打ち切るッ！！」
「――――ッ！！？」
その言葉に瞠目し、少しよろける。どうにか踏ん張り、月臣は紫苑を見る。
其の瞳は、真剣其の物だった。
「紫、苑・・・・・・。何、で・・・・？」
「何故、だって？　そんなの・・・・・・」
紫苑は其処で言葉を切り、月臣と対峙する。
「『紫苑』がお前を愛していたからだッ！！」
愛していた・・・・・・？
「過、去・・・形・・・・・・・？」
「そう」
月臣は、肩を震わせ、俯いた。
じゃあ、俺が・・・あの時、したことは、一体、何だったんだ――――ッ！？
ただただ、肩を震わせ、俯き、黙っているだけだった。

記憶39

月臣と、紫苑が対峙する。

其処に――――。

ズガガッ！！

地面に罅が入る。

其の罅は不自然にも途中で曲り、月臣にへと伸びる。月臣はぎりぎりで気付き、跳躍（ちょうやく）する。

「狼か・・・ッ！！」

着地し、月臣は憎らしげに其の名を呼ぶ。

月臣の云った通り、罅の発信源に狼が立っている。

「紫苑に近付くな・・・・・・ッ、月臣・・・」

眉間に皺をきつく寄せ、狼は月臣を睨む。

狼の後ろには、月詠、桜花、楼華、羅宇、璃宇が立っている。月臣は少し後ろを見る。其の後方には、力斗と力弥がそれぞれ大剣と弓を構えていた。

「多勢に無勢じゃないか・・・・・・」

そう呟くと、瞬時に世琶と蜻蛉が現れる。

「済まない、防ぐ前にもう、此方に来ていた・・・」

そう、世琶が云う。蜻蛉は黙って俯いていた。

「いい、何と云うか、別にどうでもよくなった。取り敢えず・・・・

・・」
「「？」」

「嘉袁を探しに行ってくれ」

「「あ・・・・・・」」
二人は声を合わせ、嘉袁を探しに行った。紫苑は肩を震わせるのをどうにか堪えた。狼は我慢出来ずに肩を震わせた。月詠は腹を抱え、静かに笑った。
『月詠様・・・・・・』
桜花と楼華は月詠をじとっと睨んだ。

月詠はどうにか笑い終え、月臣と対峙した。

どちらも藍色の髪。

顔の作りも一緒。

違うのは、瞳の色と髪の長さ。

月詠は緑の瞳で、右眼に眼帯を付けている。

髪は横の二房だけが肩より少し長く、後ろは首を少し覆うぐらいの長さ。

月臣は紅の瞳で、左眼の横に傷がある。

髪は腰のあたりまで長く、首の後ろで括っている。

「・・・・・久しぶりだな、月詠・・・」
「ええ、お元気そうでなによりです。兄上・・・・・・」

裏切った兄。

だが、月詠にとっては掛け替えの無い兄。

「どうして、こんな事を・・・するんです？　兄上」
月詠は眼を少し伏せながら聞く。月臣は嘲笑うかのように答えた。
「答えは簡単。そして、一つだけ」
一旦言葉を切り、息を吸い、月臣は云う。

「紫苑が欲しいから――――」

その言葉に、狼は余計に皺を寄せた。月詠も、同じく眉間に皺を寄せた。

「そ、んな事だけで・・・・・・」
紫苑は呟く。

記憶の片隅に、残っている。

切り裂く音。人間の怒号、叫び声。

窓から見えた死体の数々。

血にまみれ、地面など見えなかった。

ただ、自分が欲しいと云う理由だけで、あれだけの犠牲を作ったと云うのか。

「月臣・・・・・・俺は、貴方を絶対に赦さない――――ッ！！」

紫苑はそう、宣言した。

今宵の月は、何処(いずこ)へと――――。

記憶３９（後書き）

今宵の月は、何処へと昇るのだろうか？

朝は、来るのだろうか――――？

記憶４０

其の頃、嘉袁は久しぶりに来た、王宮で迷っていた。
「絶ッッッッッッ対、増築したなー・・・・」
月詠様の馬鹿ー！　此処何処よ・・・・・・・。
悶々と歩いていると、一つの巨大な扉を見つけた。
「何、是・・・・・・・。こんなの、二百年前に無かったのに」
トンと、触れる。すると、簡単に開いた。
「・・・・・・中、空洞かな？」
其のまま開き、入っていく。
「何よ、是・・・・・・・・・・・ッ！？　どうして、『此の方』が・・・・・・・！！」
嘉袁は眼を見開いた。
だとしたら、此のまま帰れない・・・・・・・。此処に、帰ってこなくちゃ・・・・！！　紫苑様が・・・・ッ！
嘉袁は拳を握り、踵を返した。
「蜻蛉、そっちに居たか！？」
「居ない。嘉袁の匂いも、しない。あいつ、気配無いから余計だ・・・・・・」
「だな」

世琶と蜻蛉は頭を抱えた。

地面に罅が入り、地割れを起こす。それ共に轟音が迸(ほとばし)る。
「ちぃ・・・！　厄介だな・・・・・・・」
月臣は歯切りをする。

霧幽殿一の『魔術王』に勝てる訳無いか・・・・・・！

「まだまだぁ！！
『大蛇、千々《ちぢ》にひきさけ』ッ」
突如漆黒の大蛇が現れ、月臣に襲いかかる。月臣は牙を間一髪で避けだが、腕を切り、血が滲みでる。それに気を取られている間に、狼が剣を構え、斬り付けてくる。月臣はそれを避け切れず、肩に食い込む。
「ぐ、ぁ・・・・・・・ッ！！」
鈍い声を上げ、苦痛に耐える。だが、すぐに足に激痛が走る。月臣の足には力斗が放った矢が刺さっている。
其の惨劇に、紫苑は眼を反らす。

以前愛した男が、大切な恋人にやられている。其の状況が、紫苑にとっては残酷だった。
「姫、つらいだろうけど、あいつはムラサキ(姫)を殺した男だ。憂う必要は無い」
「でも・・・・・・・ッ」

これは、耐えきれない・・・ッ！　月臣、狼・・・・・・・！！

紫苑は手を握り締める。

俺は、どちらの手をとればいい・・・・・・？

記憶４０（後書き）

此の手を、握ってくれる人。

ならば、俺が握るべき人の手は何処――――？

記憶４１

「これで、最後だ・・・！
『堕ちろ！　乱雷（ランライ）』」

稲妻が、迸る。それは、見事月臣に直撃した。
「ぐ、あああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！！！」
其の声と共に、月臣は倒れた。

「・・・月臣・・・・・・ッ」
紫苑は咄嗟に月臣に駆け寄ろうとしたが、月詠に止められた。
「・・・・・・フザケルナ」

狼は、そう呟いた。

「狸寝入りを、止めろ。咄嗟に防御壁を張ったくせに、何時まで倒れている・・・・・・！」

ピクリ、と月臣の指が反応する。その後、ゆっくりと月臣が起き上がる。
「まったく、最近の子供は血の気が多いな・・・」
「お前の演技にはいっそ感嘆する。今までのだって、早急に治ってるじゃねえか」
月臣はニィと嗤う。

「当たり前だろぉ・・・？　俺があんな攻撃如きでダメージを喰らうと思ったか・・・・・・？」

其の質問に、狼はあっさり答える。

「いいや、思ってねぇ」
「まぁ？　流石に？　剣王でもあって、魔術王であるお前を対峙するのは大変だったが・・・・・・お前」
一度言葉を切り、月臣は狼を睨む。
「手ェ、抜いただろ・・・？」
周りが騒然となる。
「・・・・・・別に。久しぶりだったから、身体が鈍ってるんだよ」
「嘘を付け。嘘を。」
狼は黙る。
「お前は手を抜いていた。それは、すぐに判った。だが、其の理由はさっきまで判らなかった。だけど、今、判った」
そう云い、月臣は紫苑を見る。そして、また狼と対峙する。
「紫苑が、泣くのが厭なんだろ？」
紫苑は眼を見開く。そして、狼を見る。狼はさっと眼を反らした。
「・・・図星、か・・・・・・。確かに、紫苑が泣くのは厭だな、俺も。だけど、そんな理由で、手抜きされると云うことは、お前は俺を侮っている、と云うことだろ？」
溜息交じりに月臣は云う。狼はだんまりを決め込む。
「・・・無言を肯定と看做(みな)す。流石に俺もキレた。これからは、本気で殺(ヤ)リあおうじゃぁねぇか！！」
「それは、俺も同感だ。俺も本気をだそうじゃねぇか」
「『ロクサス　壱式解除』」

其れを唱えると、狼の獲物は形を変えた。細身になり、双剣になる。黒と赤色の絶華（ゼッカ）。灰色と碧色の裂華（レッカ）。

「おおう。やっと解除したのか。久しぶりに見たな・・・二百年ぶり、か？」

「御託（ゴタク）は良い・・・・・。始めっぞ、月臣」

それと同時に、狼は駆けだした。

また、紫苑の目の前で紅い、赤い血が飛び散った。

記憶４２

もう、血を見るのは沢山だ。

あの時の様に、月臣が《禁術》を使えば。

狼は・・・・・・確実に

死んでしまう・・・・・・ッ！

「もう、止めてぇ――――――ッ！！！！」

紫苑が叫ぶ。隣にいた月詠は眼を見開く。

髪が、伸びる。腰辺りにまで、伸び。服装も変わる。

「か、『覚醒』・・・・・・なのか・・・？」

もう、横に居るのは紫苑では無くなった。其処に居た全員が愕然とした。

「狼、月臣・・・もう、止めて・・・・・・」

二人も、動きを止める。

「ムラ・・・サキ・・・・・・？」

狼が其の名を呼ぶ。月臣が少し顔を歪める。

「ヤメテ・・・止めて、もう。血を・・・・・・見るのは、沢山よ・・・・・・！　二人に・・・戦って、欲しく無い・・・ッ！！」

紫苑は胸に手を当てながら云う。

「・・・紫苑・・・・・・」

静かに、月臣が声を掛ける。

「君が、俺に着いてきてくれるなら、戦いを終わらせる。だけど、其れを否(いな)とするなら、俺は・・・戦いを続ける」

「私は・・・・・・」

紫苑は、考えてから、顔をあげ、月臣を見つめる。

「行けない」

月臣は顔を悲しみに染める。紫苑はそれでも、否を唱えた。

「貴方に、ついてはいけない。貴方のような悪逆非道(あくぎゃくひどう)な者を・・・私は信じない」

其のまま、紫苑は言葉を続ける。

「ただ、私が欲しいと云うだけで、封印の《禁術》まで使って・・・・・・地獄の業火(ごうか)を宿す式神、騰蛇(とうだ)をも使役(しえき)して・・・・・・！誰が貴方に着いて行くと云うの・・・・・・っ！」

涙を、流した。

「私は・・・・・・貴方を愛し、信じて、いたのに・・・・・・」

記憶４２（後書き）

泣きたい。

貴方を思って。

貴方の過去を思い出して、私は泣く――――。

記憶４３

月臣は顔を片手で覆った。

「『た』・・・？　愛、して・・・『た』・・・・・・？　本当に、か・・・・・・？」

「嘘を、云って・・・どうするの？　でも、それは過去の事だわ。今は、貴方には負の感情しかないわ」

真っ直ぐに、紫苑は月臣を見る。其の真摯な眼差しに月臣は顔を歪める。

君を・・・独占したい・・・・・・。

だが、それは二度と叶わない望(ゆめ)。

だから、諦めた。

月臣は紫苑を見つめ返す。其の漆黒の瞳。少し、涙目で潤んでいた。

「紫苑・・・・・・」

月臣はスッと紫苑へ手を伸ばす。だが、その間に狼が入り込む。

「其の、穢れた手でムラサキに触れるな」

剣呑に、狼は月臣を睨む。

「・・・・・・お前こそ・・・・・・」

少し、前に進む。

「お前こそ、紫苑を其の名で呼ぶなぁ――――――ッ！！！！！！」

ガ、カカカカカカッ

地面が割れ、紫苑が少しふらつく。

「きゃッ・・・！」

ストン、と地面にへたり込む。

「ムラサキ！？　大丈夫か・・・？」

狼は紫苑へ手を伸ばす。

「え、ええ・・・・・・」

笑って、其の手をとる。

私の取るべき掌。

それは、彼だけ――――。

記憶４４

この状況下はヤバイな・・・。

月詠は舌打ちをした。紫苑が『覚醒』したことで、状況はもっと悪くなった。

「さて、どうしたものか・・・？」

式神を嘉袁に渡すんじゃ無かった。今更悔やんでもどうしようもない。

と、其の時。

「『燃やせ地獄の業火――召喚（しょうかん）する火将騰蛇（ひしょうとうだ）』ッ」

ゴオォォォォォッ

其の炎は月臣を囲むように円を描く。

「なっ・・・！？」

月臣が声を上げる。

「御免なさい、月臣様。だけど・・・こうするしか、無いのです・・・・・・ッ！」

「嘉袁！！　どういうことだっ！！」

月臣は嘉袁に向けて憤慨する。嘉袁は罪悪感一杯の顔で月臣を見る。

「僕は、此処に戻ってこなくちゃいけないッ！！　月詠様を止める

ために・・・っ！！」

月詠の肩が反応する。動揺しているようだ。

「『燃やせ、燃やせ。其の身を焦がせ』・・・・・・」

地獄の炎を宿す火将騰蛇。其の炎は幾ら霧幽殿の住人でも、一旦その炎に包まれれば、焦がされ死して朽ちていく。

「嘉袁・・・！　この裏切り、どういうことだ・・・・・・！」

「『轟け濁流（とどろだくりゅう）』ッ！！」

一瞬にして、騰蛇の炎は消えて行った。

「後鬼（ごき）の力か・・・・・・！？」

吐き捨てるように嘉袁は云った。

「嘉袁・・・月臣様に害をなすのであれば・・・・・・たとえ貴方でも赦さない・・・ッ！」

其処には、世琶が居た。

記憶４４（後書き）

裏切るのであれば

地獄の最果てまで追いかけよう。

記憶４５

水の龍と騰蛇が空を縦横無尽に這いずりまわる。

「嘉袁・・・・・・これは、どういうことだ？　私に判るように説明しろ」

冷やかな声音。

「嘉袁ッ」

「こうするしか、無かったんだ！」

それと共に、騰蛇が火を吹き、あたりが燃える。

「こうするしか・・・！　もし、“あの方”が目覚めれば、紫苑様が・・・・・・ッ！！」

其処まで云うと、嘉袁は口を閉ざす。

「此処で、月詠様に死なれては困る。だから、此処から、去って下さい、月臣様」

すると、もう一柱（ひとばしら）、式神が現れた。

「ッ、青龍・・・・・・！」

「『今此処に召喚する！　十二の式神、全てを此処に召喚する！』」

その召喚呪文が終わると同時に、残りの式神、十柱が現れる。

「おい！　嘉袁ッ、此処は四神相応の場所じゃ、無いんだぞ！　その上、全ての式神を召（よ）ぶなんて・・・・・・！」

「此処を、壊します。“あの方”ごと・・・・・・！」
静かにそう云い、手を翳す。
「『全てを統べる主、嘉袁が命じる。此処を・・・粉砕しろ』」

轟音が、全ての音を塞ぐ。

霧幽殿、地下。

リーン、リーン――

其処には、氷漬けにされた、“モノ”があった。

記憶４５（後書き）

それは、存在してはいけないモノだった――――。

記憶４６

どくん――

何かに似た、焦燥感。

「この、感じは・・・・・・」

何か、身に覚えがある――だが、思い出せないもの。

「・・・？・・・・・・」

紫苑は、黙る。

「此処を、“あの方”ごと壊せば――、紫苑様は、助かる――――だから・・・・・・」

真っ直ぐに、月臣と月詠を見つめる。

「申し訳ありません、月臣様・・・貴方を裏切る、僕を赦さないで下さい――――」

自嘲気味に笑う。それは、罪悪感で一杯だ。

「っ、嘉袁、兄さん・・・・・・！」

紫苑は叫ぶ。

……自分の兄と仲が良かった嘉袁を、兄と同様に慕い、“兄さん”と呼んでいた。

その懐かしい呼び名に、嘉袁は肩を震わせた。

「紫苑、様・・・・・・」

苦渋に染まった顔。そんな顔を見たかった訳じゃない。確かに、自分は最愛な紫苑を殺した。だが、そんな顔を見たかった訳じゃない。

「なん、で？　なんでこのような事をするの・・・？　どうして、嘉袁兄さん・・・・・・ッ」

どうして？

自分が嘉袁に殺された時より、酷く悲しい。

「紫苑・・・・・・」

狼はそっと近付き、その震えている肩を抱く。それを見とめた月臣は顔を歪めた。

「僕は、朧（おぼろ）からキミを任された・・・・・・だから、こうするんだよ――」

先ほどより、悲しそうに、自分を蔑む様に笑う。

次々に落下する建物。女官達が逃げる。

此処にとどまっていれば、確実に此処に居る紫苑以外の全員が怪我をする。死ぬことは無いが、それを免れても、騰蛇の炎で死んでしまう。

騰蛇の炎は地獄の業火。霧幽殿の住人の治癒力を上回る。だから、一度それに焼かれてしまえば死んでしまう。

――此処に居れば、紫苑を先に失くす・・・！　それはヤバい・・・

・・・・・ッ。

狼は内心舌打ちする。
「おいっ。月詠、なんとかならないのかっ！！？」
「俺に云うなッ！　俺だってこれはどうしようも無いっ」
狼に続いて月詠も叫ぶ。
「月臣ッ、これはお前がどうにかしろっ！」
「ほう、俺にあの《禁術》を使わせる気か・・・・・・？」
「あれ以外に方法はねぇのかよ、このド阿呆弟ッ！」
「今弟とか関係ねぇだろぅがっ！」
「それこそ兄弟喧嘩今とてつもなく関係ないだろうがっ」
狼に叱咤され、二人は黙る。
「とりあえず、どうにかするか・・・・・・」
「だな・・・・・・」

何故か以心伝心した二人。

記憶４６（後書き）

その《刻》は

もうすぐ迫っている――――――。

記憶47

今も、鮮明に覚えている。

あの笑顔を――――――――。

崩壊しつつある霧幽殿。蠢(うごめ)く十二神将達。

「嘉袁兄さん・・・・・・・」

少しずつ息苦しくなる。それでも、紫苑は嘉袁に呼びかけた。必死に、手を伸ばして、求めるように。

「ムラサキ・・・・・・・」

ギュッと、肩を抱く。カタカタと、震えているのが、見ていられない。

「も、う・・・・・・・」

これ以上は

「止めて、やめ、・・・・・・・」

これ以上、誰も傷つかないでほしい。だから・・・

「止めてぇ――――――――ッ!!」

紫苑は叫ぶ。それと同時に、紫苑を包むように淡い光の球体が出てきた。そして――

「そ、んな・・・・・・神将達が・・・消えていく・・・・・・」

嘉袁は呆然とする。その球体に包まれ、式神達は消えていく。

ずるり、と紫苑は崩れ落ちる。それを膝が地面に着く寸前で狼が支える。

サアァァァァ

小雨が、降る。それでも、騰蛇の炎を確実に消している。

「これが・・・霧幽殿の秘宝、紫苑様の能力・・・・・・」

予測不可の玄宗霧幽殿最強にして最恐の力を持った紫苑。

時に、人を癒し、時に、人を闇を葬る。

だから、紫苑は崇められていた。姫として、閉じ込められていた。

「お願いよ・・・これ以上、誰かが傷つくのを見たくないの・・・・・・！」

ぽたぽたと、雨にまぎれて、紫苑の涙が頬から滑り落ちる。

記憶４７（後書き）

ああ、この悲しみも、全て雨に流せれたら、

どれだけ救われるだろう――――――。

記憶４８

紫苑は、崩れ落ちる。だが、這いずってなお、嘉袁に近付こうとする。
「かお、に・・・さ・・・・・・っ」
嘉袁の名前を呼ぼうにも、先程吸った煙の所為で、上手く声が出てこなくなった。

そうして、紫苑は倒れた。
「紫苑様っ！？」
嘉袁は叫び、近付こうとするが、羅宇が放つ矢に邪魔される。
「それ以上、姫様に近付かないでいただこう」
力斗と力弥が嘉袁の前に立ち塞がる。
「ちっ・・・・・・」

「月詠様！　紫苑様は・・・っ！？」
「桜花、早く姫に治癒を！」
桜花は膝が擦りむけるのもお構いなしに、地面に勢いよく座る。
「『我ガ身手（みて）ハ　全（スベ）テノ癒（イヤ）シ　零（ぜろ）の癒シ手』」
そう桜花が唱えるのと同時に、紫苑の呼吸は幾分楽になる。
「ムラサキ・・・・・・」

少し静観していた月臣は、これ以上紫苑のつらい姿を見たくなくて、身を翻す。
「一旦、引き下がろう。だが、また紫苑を貰いに来る。その時は、手加減をしない。《禁術》も使わせていただこう」
嘲笑うかのように、云い、月臣は消える。後を追うように蜻蛉と世琶が行く。

嘉袁は、突っ立ったままだ。
「お前は、何故行かない？　お前はあちらの者だろう」
低く、力斗が問う。
嘉袁は、前を芳賀見兄弟に、後ろに璃宇というように、囲まれていた。
「僕は、月臣様から、紫苑様を護らなきゃいけない。実際、僕は裏切るつもりなんて、さらさら無かった」
眼を伏せ、嘉袁は手を見つめる。
この手は、咎色に染まった。
あの、二百年前の紫苑の時と。
紫苑の兄、朧を殺したときに、二度も、咎色に染まった――――――。

記憶49

あの後、紫苑達は紫苑のもと居た世界に来て、速攻暗示にかけ、一軒家を買った。滅茶苦茶高い一軒家。豪邸だ。

「家具とかは色々と出せばいいだろう。取り敢えず、姫の部屋は一番広い所にして、ベッドも天蓋つきにして・・・・・」

『『『「「やり過ぎ（だろう・です・でしょう）月詠（様）」」』』』』

「・・・・・・そうか？」

『『いーや、やり過ぎではない（わよ・よ）！』』

『『『「「「・・・・・・あ・・・・・・・・・（忘れてた）」」」』』』

全員、いきなり現れた人物達を見て、口を開けた。

其処には鳳凰（ホウオウ）、鸞凰（ランオウ）と江（コウ）、瑙（ノウ）が立っている。

『『（貴様等・君達）、忘れて（ただろう・いただだろう）？　ついでに作者も・・・・・・』』

『『『「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」』』』

『『応え（んか・なさい・てよ）っ！！』』

『『『「「「忘れてましたー。それがなにかー？」」」』』』

『『（何故・なんで）タメで云う（の・のよ）！？　ついでにムカツク（わ・よ）！』』

全員思った。この二組で遊ぶのは楽しい、と。特に狼は悪辣に笑っていた。

「う・ん・・・・・・」

『『『『『「「「・・・・・・・・・・・・シィ――――――――・・・・・・・・」」」』』』』』
全員で忍び足でその場を去った。
「姫が起きるまでに、食材とかを調達しに行こう」
『『『『「（リョーカイ・判りました）」』』』』
「各務は姫の傍に居て。起きたら俺に伝えて」
「判りました」
各務は紫苑の所へ行く。
「・・・桜花と楼華は着替えろ。そのゴスはちょっと・・・・・・」
『判りました。着替えてきます』
そう云って桜花と楼華は着替えに、別室へ移動した。
「羅宇と璃宇は部屋の掃除をよろしく」
『仰せのままに』
羅宇と璃宇は掃除道具を調達へ、出掛けた。
「狼は俺と買い出しな」
「リョーカイ」

こうして、新居での生活が始まった。

『『やっぱり（俺・私）達は忘れられている・・・・・・』』

記憶５０

リーン―、リーン・・・・・・・

「――――・・・・・・此処、は・・・・？」

紫苑は起きた。だが、見知れない場所だ。

「紫苑様、大丈夫ですか？　と、いうか・・・・元に・・・・・・・『覚醒』前になっていますね・・・・・・・」

少し渋い顔になった各務。

「各務・・・・？　何で、俺・・・・・・・」

光が眩しいのか、少し眼を細める。

「ああ、少し光を落としますか？」

こくん、と頷くと、各務が笑って、少し光を落とす。紫苑は身体を起こし、頭を抑える。

「・・・・此処は？」

「貴方様が元居た世界です。霧幽（あそこ）殿は再建の為、一旦此方に異動してきたのです」

「・・・・そう・・・・・・・」

納得、だ。だから・・・・・・・洋館なのか。しかも豪邸だ。吃驚。

「あ、そういえば、皆は？」

「天白（タカシロ）姉妹は近所にご挨拶&買い物。秋風兄弟は屋敷の掃除。月詠様と狼殿はお買い物です」

「・・・・・・天白姉妹？　（今、屋敷と云ったな？）」

「ああ、桜花殿と楼華殿です」

「力斗と力弥は？」

「鳳凰様達の慰めに・・・・・・・」

「慰め？」

「ええ、まぁ・・・・・・ちょっと有りまして・・・・・・・・・・

・・・」
何故(なにゆえ)眼を反らすか、各務よ。
『『紫苑っ、起きたか！！！！？』』
「わっ！？　鳳凰、鸞凰、江、瑙・・・・・・」
「皆々様方・・・・・・紫苑様はまだ起きたばかりです・・・・・・・」
『『関係有るか――――ッ！！』』
「関係有るっつの。貴方達は何をしているんです・・・・・・」
はぁ、と溜息をついて入って来たのは月詠だ。その後ろには狼も居る。
「あ、狼。お帰り、月詠さんもお帰り・・・・・・・」
「姫、何で俺が最後・・・・・・」
しょんぼりする月詠の隣で、狼は勝ち誇った顔をした。
「ただいま、紫苑。元に戻ったんだ・・・・・・」
少し、影を下ろした瞳をする狼。紫苑も、困惑する。
――どうして、そんな顔をするの？　俺は傍に居るよ・・・・・・・？
紫苑は少し俯く。

記憶５１

紫苑は自分も屋敷の掃除をすると云った。皆は反対したが、紫苑が笑顔で命令してきた為、渋々承諾した。

「にしても、広いな……此処……」

紫苑は天井の高さに少し驚く。霧幽殿もそれなりだったが、平屋だったし、これ程天井は高くなかった。

「姫―、本当に無理しなくていいんだよー？　姫がやることじゃないしー」

「俺だけのうのうと過ごすのはちょっと厭なんです」

きっぱりと紫苑は笑いながら云う。

『ただいま帰りました。あ、紫苑様』

帰って来たのは天白姉妹だ。いつものゴスロリじゃ無くて、普通の服だった。

「わー、二人共のそんな恰好初めて見た。あっちでもずっとゴスだったし……可愛いね」

これまた極上の笑顔で云えば、二人は顔を赤くした。

「天然タラシ健在かー……これは厄介」

『月詠様』

「お。久しぶり、白銀（シロガネ）、黒鉄（クロガネ）、黄金（コガネ）。嘉袁は何か吐いたかー？」

月詠の質問に答えるのは黒鉄だ。

「いえ、何も。ただ、黄金が心を詠んでも、嘉袁が云っていた通りで……。嘘では無いようです」

「本当か？　黄金」

「はい。嘘偽りを述べてはおりませんでした」

「そうか……」

月詠は少し楽しそうに、面白そうに微笑んだ。

紫苑は二階に行き、テラスへ出る。
「うわ……風キモチー……」
ふわりと心地よい風が頬をくすぐる。此処は高台に建っているらしく、街を一望できる。澄んだ紅色の空。夕陽が綺麗に輝いている。
「……月臣……どうして……」
――俺を求める？　いや、求めるのは“ムラサキ”か……。
紫苑は目を細める。脳を過るのは、月臣と、狼の姿。
皆が求めているのは俺じゃない。
皆が求めているのは紫苑だ――――――。

記憶52

ポチャン、ポチャッ

「――――……いいかげ、これ…外してくんない？　痛いんだけど……」

ギシ、と音をたてて、嘉袁は少し身じろぐ。

「訊き届けるとでも、思いですか？」

「思いじゃないです」

ニコッ、と血のにじんだ貌で笑ってやれば、黄金は見下すかのように嘉袁を睨んだ。

――自分のほうが偉いと、思ってんのかね……？

実際の階級、立場上、嘉袁のほうが上だ。魏凰（ギオウ）家、篁（タカムラ）家、名古屋（ナゴヤ）家、秋風（アキカゼ）家、天白（タカシロ）家、芳賀（ハガミ）見家、そして嘉袁の一族、霧播（キリハド）弩家だ。

――各務より下のくせに、粋がっちゃって……

嘉袁は黄金を見る。これで本当に男か？　と云いたくなる容姿だ。だが、三つ子で女なのは白銀だけだ。

――あ、やば……血流し過ぎた……

「白銀、その人を解放して」

その時、訊きなれた声が訊こえた。のろのろと貌を上げれば、其処には紫苑と狼が立っていた。

「我が君……！？　貴方様がこのような場所には来てはいけません……ッ。しかも、狼様まで……！」
「いいの。白銀、嘉袁兄さんを離して。血が流れ過ぎてる。手当てしなくちゃ……」
「……ッ」
紫苑の頼みなので、訊かない訳にはいかない白銀は、嘉袁を解放した。
「さがっていいよ、お疲れ様、白銀」
「勿体のうございます……」
恭しくお辞儀をしてから、白銀は階段を上った。
「……嘉袁兄さん、大丈夫？」
“覚醒”が解けたのに、よく覚えてるね……」
自嘲気味に、挑発気味に嘉袁は哂った。
「“紫苑”を通じて総(すべ)てを思い出したんだ。ねぇ、嘉袁兄さん、なんでそう笑うの？　どうして？」
「……」
嘉袁は少し眼を瞠った。バッと貌を上げれば、幾分か優しげな表情をした紫苑が間近に居た。
「ねぇ、俺と共に生きてくれない？　俺は、嘉袁兄さんが居なきゃ……ダメなんだよ……」
そう云えば、嘉袁は貌を歪め、紫苑に抱きついた。
――紫苑様、紫苑様……！！
声をあげて、嘉袁は泣いた。

記憶53

「姫……貴方と云う人は……俺達が貴方の決めたことに逆らわないと知っていてやっているでしょう？　しかも、自分より小さいからって、膝の上に乗せて……。狼が物凄い形相で睨んでるよ、嘉袁の事……」

月詠を無視して、紫苑は嘉袁の頭を撫で続けた。

「紫苑様、いい加減……くすぐったいです……っ！」

「いいじゃん。昔は俺が嘉袁兄さんの膝にのって、こうしていたんだから」

ニコニコと嬉しそうに笑いながら紫苑は撫でた。

「殆んど俺が乗せていた……」

「狼、醜いから止めておけ」

羅宇は狼の肩にぽん、と手を乗せ、云った。だが、狼は羅宇を睨み、云った。

「厭だね。紫苑は俺の女(もの)だ。たとえ、今が男だとしても、紫苑は俺のっ！」

「最近狼の束縛が強くなってないかい？」

月詠はじとっ、と狼を見る。狼は当たり前、とでも云うように嘲笑を浮かべた。

狼は嘉袁を紫苑からどけ、自分の膝のうえに紫苑を乗せた。

「やっぱり…紫苑、軽いなー。昔と一緒だわー……」

「俺、そんなに軽いかな……？　じゃなくてっ！　狼、下ろしてよ！」

「これが嘉袁の味わっていた気分だ。しっかり堪能しとけ」
「御免なさいっ！　もうしっかりとこれでもう十分と云うほど堪能いたしましたあぁッッ！！」
「嘘をつくな、嘘を。もっと乗っておけ」

みな思う。訂正、壊れ始めた、と。

紫苑はどうにか狼から逃れ、嘉袁のおんぶお化けと化した。
「……紫苑様、僕はこれ以上狼の不興をかいたくない……」
「…俺が、傍に寄るのは厭なの？　俺にべたべたされるのは、厭？」
うるり、と眼を潤ませれば、嘉袁はう、とたじろぐ。
「嘉袁……紫苑にべたべたされているのはまだいいだが、紫苑を泣かすのは赦さん……ッ！！」
「わ、わ！？　ご、誤解でしょう！？　酷いよッ！！？」
嘉袁は叫ぶ。紫苑はそれを見ながら笑った。

よかった。蟠(わだかま)りが有りつつも、普通に接せられて――――。

記憶54

氷漬けになっている“もの”を見上げ、月詠は溜息をつく。

――すぐに別次元に異動させた甲斐があったな……。無傷だ……。

その氷に触れた。氷なのに、不思議と冷たさは無い。当然だ、これは本物の氷では無い。

「さて。……薇断（ミコト）か？」

《お久しぶう、月読尊（つきよみのみこと）》

「はは。懐かしいな、それ。だけど、それは俺の本名じゃない。それは前世だろう？」

《だが、お主は月読尊。生まれ変わりであっても、それは変わらぬ》

「まったく……。頑固だな、薇断は」

ふわりとした白色に淡い水色を足したかのような髪を空中で踊らせ、真っ直ぐに月詠を見つめる眸は鮮やかな紅色。

名を、薇断。玄宗霧幽殿に住みつく守り神だ。

《紫苑殿には、まだばれていないだろうな？　これを紫苑殿が知れば、驚き、お主を幻滅するだろうに》

「それは、困るなぁ……。姫に嫌われるのは、俺、耐えきれないや……」

これは、本心だ。彼女、否、彼に嫌われるのは、厭だ。たとえ、何があっても、嫌われるのだけは、耐えきれない。

《さて、紫苑殿に挨拶をした方がいいだろうか？　わらわはまだあのお方にお逢いしておらぬ》
「そうだなぁ……、逢う？　逢いたい？　逢いたいなら、逢わせるけど？」
《ムゥ～……。そうじゃのう……》
逢いたい。だが、彼は自分の事を覚えていないかもしれない。覚えていたら、それはそれでかなり嬉しい。
《ふむ……》
やはり、逢いたい。
そう思った直後、ばたばたと慌ただしく黒鉄が走ってきた。
「月詠様っ！　紫苑様が貴方様をお探しで……！　下手したらこちらに来るかも知れませんっ！！」
「それは困る！　今から行くから姫の足止めをッ！！」
バッと蒼い顔して月詠は黒鉄に命じ、氷に暗視の術をかけ、薇断に見張っていてくれるように頼みこんだ。
《よかろう。紫苑殿に逢いたいのう……》
そう呟いたのを無視して、月詠は走って行った。

「あ、月詠さん！　よかった、何処に行ったのかと思った……」
急いで行けば、ほっと安堵して、口を綻ばせた紫苑が居る。それに月詠は少し苦笑する。
――無防備な姫だな……。
なんて、何て心優しく、穢れの無い姫だろう。穢れなく綺麗な眸。純粋無垢で、純粋無知。
「姫は……」
ぼそりと呟く。

アレを知ったら、貴方はどんな反応をするだろう。

自分を嫌うだろうか？　軽蔑するだろうか？

まっすぐに、月詠は紫苑を見る。黒曜石を映したかのような綺麗で鮮やかな黒色の眸。

「……それで、姫はなんで俺をお探しに？」

「あ、その……。買い物に行きたいんですけど……」

「……！？　買い物……？！」

「はい。みんなは月詠さんがいい、と云えば、いいって云ってて……」

「あー……成程ね……」

くすり、と苦笑する。みなは紫苑が出掛けるのをよしとしない。いつ、あいつらが襲ってくるか判らない。だからこその狼の存在なんだが、みなは紫苑のこととなると周りを見なくなるようだ。

「ま、狼がついて行くだろう？　だから、行ってもいいよ。ただし、6時までには帰ってきてね」

バチン、と片眼をつむって云ってやれば、紫苑は少し眼を見開き、笑顔ではい、と返事をした。

――……“覚醒”をすれば……

また、再び“覚醒”をすれば、“可能性”はある。

――俺の主……後、少しです……

月詠は天を仰いだ。天窓から差し込む光が、眩しい。

まるで、輝く紫苑のよう――――――。

記憶55

紫苑は、狼と二人で買い物に出掛けていた。

黒髪で綺麗な空を映したかのような鮮やかな碧色の眸のうえ、長身で顔のつくりが上等な為、よくナンパ、芸能プロダクションからのスカウトが多く、時間が予想以上に掛かった。

「御免、俺の所為で時間喰って……」

「いや、いいよ。俺はまだ屋敷(あそこ)帰りたくない」

そう云って、紫苑は少し暗い顔をする。狼は訝しり、眉間に皺を寄せる。

――だって、あそこに居る人達は全員、“紫苑”を待ちわびている。俺じゃ無くて……

つらい。自分の居場所を感じられない、息苦しく感じる。

《紫苑……》

ふと、そんな声が身体の中で訊こえた。神経を研ぎ澄ませ、立ち止まり、目を閉じれば、訊き慣れている声が訊こえる。

《紫苑？　私の声が届く？　訊こえる？》

――……え？　ムラサキ……？

《正解っ！　よかった、判ってくれてっ♪》

嬉しそうに笑うムラサキが頭に浮かぶ。何故こうして会話が出来るのだろう？　と思い、紫苑は訊く。

――えーと、何で俺、ムラサキと会話出来てんの？

《一度、私が“覚醒”したからよ。少し思考が繋がったみたい。よかったわ》
――よかった？　何で？
《一度、貴方と会話をしたかったから。御免なさい。私の所為でこんな事になって……》
紫苑を巻き込んでしまった事に、前世（じぜん）の所為でこうなってしまった。だから、ムラサキは紫苑に謝る。
紫苑はクスリと笑う。それに狼は驚く。人知れず紫苑が微笑んだのから、恐怖だろう。
――大丈夫、俺は……これが、運命なんだから、それを、素直に受け止めるよ。
《貴方は私に似ずに、正直で真っ直ぐで素直なのね……。いいわ、それと……狼に一つ訊いてくれない？》
――え……？

次に、ムラサキから紡がれた言葉に、紫苑はふいた。

「ッ！！？　紫苑っ！？　さっきからどうしたッ！」
「い、いや……なんでも、ない、訳じゃ、無い……」
「どっちっ！？」
紫苑はぞうにか、抑え、狼に向き直り、ムラサキに頼まれたことを云う。

「ムラサキからの質問。私が死んだ、二百年間、誰と一緒に居た？　だって……」

狼は眼をめいっぱい開き、口をパクパクさせた。紫苑がムラサキとコンタクトをとれたことに驚いているのと、まさかの質問に驚いているのだろう。
「で？　返事は？」

さすがに、答えが無いのは、紫苑もちょっと語気を強める。

「あ、え……その、えーっと……」

眼を不自然に逸らす。それにもっと怒りを覚え、眉間に皺を寄せて、狼に顔を近づける。

「狼……？」

「……一度、だけ……月詠に云われて……」

返事も遅く、しかも浮気の発言をされ、紫苑とムラサキはキレる。

「《狼の浮気者――――ッ！！！！》」

何故かムラサキの声までもが重なり、紫苑達は叫び、紫苑は狼にアッパーを喰らわせる。

狼が持っていたバッグが落ち、グシャッという卵が割れる恐ろしい音が訊こえる。

「狼の、阿呆……」

そのまま紫苑は走り出した。

記憶56

「《狼の浮気物――――――ッ！！！！》」

懐かしい声と共に、怒鳴られ、殴られた。

「狼の、阿呆……」

ふと、見えた貌は悲しそうだった。

狼はのろのろと起き、バッグを覗いた。

「あっちゃー……」

先程の音を嘘だと思っていたかったが、やはり卵が割れていた。

「桜花と楼華に殺される……」

そう思いながら、狼は立ちあがる。

「さて、追いかけますかね……」

ふ、と笑って狼はバッグを持って走り出した。

我武者羅に走った。

だから、此処が何処だが判らず、紫苑は半泣きになっていた。

昔から、知らない町に一人で入るのは苦手だった。

お化け屋敷などで迷子になったりとか、そんな事が多く、怖かった。

「トラウマって、やつ……？」

そう呟き、ベンチに座る。

《紫苑……》

ムラサキの労りの声が訊こえる。

「ねぇ……狼の事浮気者って、男（俺）が思ったら……変、かな……？」

《そんな事は……無いわよ。だって、男であっても、貴方は私。私は貴方。気持（おもい）ちは一緒よ……》

ムラサキは微笑みを交えて云った。

「……否、やっぱ変だわ……」

《私の労りを返して頂戴》

紫苑の呟きに、ムラサキは云う。

「あ、御免……」

少し笑ってしまう。

自分と会話をしている筈なのに、ちっとも変な感じはしない。

むしろ、温かい。

狼のとは違う温かさ。いつまでも感じていたい。

「ムラサキ……君は俺なのに温かいね……」

《ふふ。私もそう思うわ。貴方は私なのに温かいわ……》

やはり同じなだけはある。同じ思考だ。

「俺……たまに思うんだ……」

その時、狼が近くに居ることを知らずに紫苑は喋った。

「俺は、本当に必要な存在なのかな、って……」

狼は眼を見開いた。

「だって、皆が必要としているのは……ムラサキじゃないか……俺は、必要ない……」

その瞬間、紫苑は誰かに抱かれていた。

記憶57

誰かに、抱き締められてるな、と思った。そして、それが誰なのかも、匂いと髪の色で判った。
「…狼……？　訊いて、たの……？」
そう云えば、狼はもっと力を込めた。少し苦しいと思う。だけど、どうしても、そのままで居てほしかった。
――自分が、其処に、狼達の傍に居ていいと云ってもらえているような気がするから。
「紫苑、絶対に、そんなことを月詠達の前で云うな……ッ！！　皆が悲しむ」
「どうして？　どうして悲しむのさ……」

「紫苑が大切だからだ！！」

その剣呑に呑まれ、紫苑は押し黙る。
「ムラサキの生まれ変わりとか、そんなの関係無く！　皆は紫苑が大切なんだ！！　だから、もう二度とそんなことを思うなっ！！」
狼は紫苑を自分の方に向きを直し、云った。
あまりにも真剣に云うから、紫苑は少し涙目になった。
「そう、云われて、も……ッ」
「紫苑、信じられないならムラサキに訊け。ムラサキが、体内で覚醒しているなら、皆の心が判るはずだから」
云い募られ、紫苑は渋々ムラサキに頼んだ。
《――――……紫苑、誰も、貴方を必要ないと、思っていないわ》
その言葉に、紫苑は眼を見開き、雫を零す。狼はさすがにギョッと驚き、涙をすくう。

「思って、ないって……誰も、俺の事、必要ないって、思って……
……ッ！！」

嗚咽を零し、そう紡ぐ。

「俺、は……皆の、傍に、居て…いいの……！？　これからも、ず
っ、と……ッ」

その質問に、狼は紫苑の髪を梳きながら頷いた。

その後、ずっと紫苑は泣いていた。

「……で？　姫は泣いている訳……」

狼は笑顔で仁王立ちになっている月詠の前で正座をさせられてい
た。

「で？　なんで俺が正座をさせられているんだ？」

「ある意味お前が泣かしたから。しかも、浮気までしてさー……お
前バカ？」

「アンタが云ったんだろーがッ！！　何で俺なんだよ！」

狼は叫ぶ。だが足が痺れ過ぎて立てない。座ったままだと、大し
た威力が無い。

「フハハハハハッ！　今のお前じゃ俺には敵わないぞっ！」

「ッチ……！　“焔龍（エンリュウ）”！！」

狼は叫んで、式を出した。月詠はまさかの事態に、絶句し、勢い
で避けた。髪は掠ったが、どうにか無傷だ。

「な、なにをする！　当たったらどうするッ！？」

「ふざけたこと云う！！　当てる気満々に決まってんだろうがっ！

！」
「尚更悪いわぁっ！！」
月詠は叫び、焔龍を消滅させる。
「人の式を消滅させんな！！」
「じゃ、どうしろとっ！？」
それを見て紫苑は思う。
たとえ、何があってもこれだけは失いたくないな、と――――。

記憶58

肩で息をし、もがき続ける。

「…ぁ……はぁ……ッ！　紫、苑……ッ」

月臣は寝台の上で身悶えた。苦しい。あの日から、ずっと寝ぐるしい。

「紫苑……紫苑……ッ！　逢いたい…触れたい、よ……」

ギュッと胸の上で拳を握る。

「…っく……！　流石に……ガタが来たか……」

月臣の一族、篁家に伝わる負の秘宝、《禁術》。月臣はそれを宿して生まれた忌みつきの子。

それを宿すものは、不老不死だが見が朽ちて行く。腐り、最後には植物状態になる。

「ねぇ……紫苑、俺には時間が無いんだよ……」

どうしても、君と一緒になりたい。

一度だけでいいから。あの肌に触れたい。

「一度だけでいい……お願いだから、君を抱かせて……紫苑……」

自嘲気味に微笑み、月臣は眠った。

呼ばれたような気がして、紫苑は貌を上げた。
「……？　月臣……？」
そう呟く。それを、傍に居た狼は訊き逃さなかった。
「酷い。俺と一緒に居るのに月臣の名前だすなんて……紫苑も浮気者だ」
「……どうする、ムラサキ。こう云っているよ君の彼氏。心狭いね……」
《我ながら悲しいわ……》
ムラサキががっくりと肩を項垂れているのが面白くて、紫苑は微笑う。
「狼。ムラサキが、我ながら悲しいってさ！」
「酷い！　ムラサキ、そんなこと云わないでよっ！」
ガウッと狼（オオカミ）の名前の如く喰ってかかってくる狼。
「はは。俺でもそう思うよ、狼」
本当におかしくて、紫苑は片手で腹を抱えながらもう片方で狼の頭を撫でた。

男にしては細くて、サラサラな髪。その上濡れた様な漆黒の髪。今は頼りなさげに垂れさがっている眸も、鮮やかな青空を映したかのような碧色。
全てが綺麗過ぎて、直視できない。
「本当に、狼は綺麗だなー……」
「…は？　どういう意味？」
いきなりの紫苑の発言に、狼は驚く。紫苑もつい言葉にしていまい、カァッと頬を紅潮させる。
「あ、いや……ね……狼って、綺麗な髪と眸してるでしょ？　だか

ら、つい……」
バタバタと両手を横に振らせて、苦しい云い訳をする。
そんな紫苑を見て、狼は見る見るうちに眼を見開き、最後には極上の笑顔をした。もう、それは一輪の薔薇の如き笑顔。
「う・わ・わ・わ・わ・わ・わ・わ……ッ！　紫苑、可愛いなぁ……本当にッ」
狼は満面の笑みで紫苑に抱きついた。
「ちょ……！　さ、流石に、これは……！」
ムラサキが怖い。
そう思っていると、案の定ムラサキは切れていた。
《幾らね……私の生まれ変わりと云ってもね……これは赦せない！　狼のバカッ！　今すぐ紫苑から離れなさい！　紫苑が穢れる！！》
「あれ？　そっち！？」
まさかの期待裏切り。てっきり自分が罵倒されるもんだと思っていた。
「？　何のこと？」
「あ、いやね……えーっとねぇ……」
どう説明すればよいものか。と、いうか説明してよいものか。
「……云わないでおく。狼が哀れ……」
「えぇ！？　どんだけ！？　な、なに、ムラサキなんか変なこと云ったの！？」
「うん、まぁ……気にしないで、狼！」
「気になるわ！　余計に気になるわッ！　話してよ、紫苑！！」
狼は喰い下がっていくが、紫苑は一切口を割らずに、苦笑いを浮かべるだけだった。

記憶59

日に日に、月臣が弱っていく。

それを見て世琶(セイハ)は貌を顰めた。

「月臣……貴方……」

「ああ。見られちゃったな……このこと、蜻蛉(カゲロウ)には云わないで……彼は怖い……」

世琶は自分はいいのか、と思い片眉を上げる。

「云っておくが……私とて、お前がそんなになっているなら、黙っていられない……」

私はお前に創られたんだぞ？

そう、耳打ちする。

月臣は自嘲気味に哂いながら世琶の髪を梳いた。

「御免ね。そうだったね、君等は俺が創ったんだった……」

髪を梳くのを止め、自分の髪を掻きあげた。

「何故……お前はそうしてまであの女を欲する……」

月臣のネクタイを掴み、少し首を絞めてやる。

「ぐえ。痛いよ、世琶」

少しも痛そうにしてないくせにふざけたように云う。

「どうして！　どうして、そんなになってまであの女を欲するッ！？　私の方が、お前の傍に居たのに……ッ！！」

「何度も云うが、俺はお前の気持ちに応えられない。それに、お前

はただのヒトガタだ。いいきになるな」

侮蔑するかのような視線。世琶は耐えられず、涙を流す。

「……余計な感情を入れてしまったようだな」

月臣はだるそうな身体を無理矢理起こし、其処に世琶だけ置いて出て行った。

ぽたり、ぽたりと涙が頬を伝う。

「つ、き…おみ……」

そのまま世琶は崩れた。

◇◇◇◇

ふぅ、と息を吐く。吐いた息は白くなっている。

「こっちは……まだ雪降らないんだ……」

ふわりと舞うあの白が好き。

だから、冬が一番好きな季節。

「玄宗殿は桃色の雪だっけ……」

あの雪を見てた時、ずっと狼は眼を伏せていた。

やっと、今やっとその意味が判った。

彼にはあれが血に見えるのだ――――。

己の咎を映したかのような色。

それを見るのがつらいのだ、彼は。
「咎、か……」
ならば、自分の咎は何だろう。
誰しも、一つは持っている。

―己の咎を―

きっと、心の奥底に封印した、絶対秘密の暗闇。
「なんか、さっきから……つっかかるなぁ……」
―月臣の事が。
胸騒ぎが止まらない。厭な予感しかしない。恐ろしく、怖い予感。
「月臣……」
此処は、玄幽殿程ではないが広い。それの所為もあるかもしれない。
広く、静寂が支配するこの空間。厭な思いしか頭によぎらない。
「怖い……」
紫苑はそう呟いて走りだす。

―ドン

紫苑は走ることに夢中になっていて、前から来ていた人物に気付かなかった。
「紫苑様？　どうしたんですか？」
「……力斗（リキト）……力、斗ぉ……ッ！」
優しく微笑む力斗に紫苑は縋り、泣き始めた。
「え、ちょ……紫苑様！？」

ひとしきり泣いて我にかえれば、自分は力斗に膝枕をしてもらっていた。
「う、わ・わ・わ……っ！！　ご、ゴメン！」
バッと起きようとすれば力斗はがっしりと紫苑の頭を掴み、元に戻した。
「もうちょっと寝てて下さい。それに、急に起きたら眩暈がするでしょう？」
ひたり、と額に置いてある力斗の手が冷たく、心地いものだった。
「……力斗の手、冷たくて…気持ちいや……」
ふわり、と微笑んで云えば、力斗は少しばかり頬を紅潮させる。
「紫苑様……あまり人の前で笑顔にならないでくださいね……」
少し困ったように微笑う力斗を不思議がり、紫苑は力斗の膝の上で首を傾げた。
「くすぐったいです、紫苑様……」
ふふ、とさっきより表情を柔らかくして微笑う力斗。それに安心した紫苑も笑った。

記憶６０

雪が舞う。

「――――ッ……落ち着け……」

此処は玄幽殿（あそこ）とは違う。

狼は深呼吸をしたあともう一度空を仰いだ。

舞うのは、白き雪。

何を恐れる必要がある――？

ふるり、と肩を震わせる。

それは、寒さからだけではない。狼の貌はじょじょに青くなる。

「大丈夫……落ち、着け……大、丈…夫、だから……」

何度もそう自分に云いつける。

狼は青くなった貌を上げた。白き雪が一瞬紅く見えた。

――「狼……」

優しい声が狼を呼ぶ。狼はそれをも拒絶する。

「…ぁ……！！　ッ、は……！」

過呼吸。そう思ったが、時すでに遅し。狼は目の前が暗くなり倒れた。

「……ッ！　し……ぉ……ッ！！」

狼は“紫苑”と呼ぼうとしたが、最後まで音にならず、そのまま気を失った。

―長い髪が揺れるのをずっと見ていたかった。

綺麗な茶色の髪。光に照らされ輝く髪。

あれをずっと触っていたかった。

―あの濡れた様な黒曜石のような眸。

あれで見つめられるのが好きだった。

あの眸が涙に濡れるのをもう二度と見たくない。

―紫苑―

あの名が好きだ。

あの名を呼ぶのが好きだ。

―狼―

あの声で呼ばれるのが好きだ。

紫苑に呼ばれるのが好きだ。

緋(アカ)色は咎の色。

俺の罪の色。

それは、一生消えることなく癒えない心傷(キズ)。

それは、一生俺の中で膿んで俺を貪る。

赦されないと、知っている。

だから、赦してもらおうなんて考えていない。

思った事も無い。

だから、俺はずっと贖罪し続ける。

ただの自己満足だと、判っていても――――――。

記憶６０（後書き）

今回は少し短いかもしれません……（汗）。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3659o/

懐かしい思い出美しき日々

2011年9月17日20時50分発行